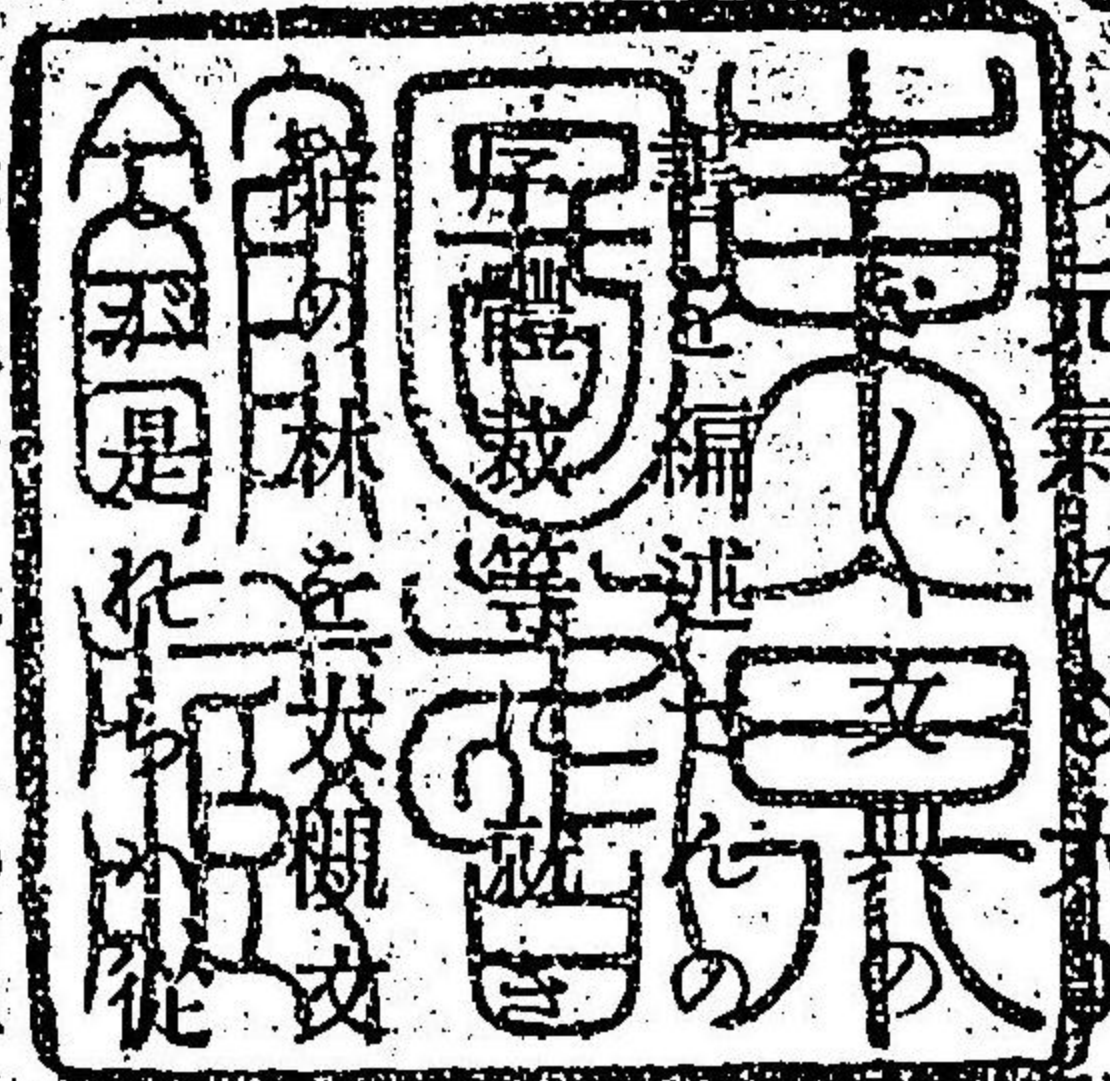


緒言

12-319 42/435/1111



國語ハ國民一統に貫通し、外邦に對して我が同胞一體の感覺を喚起する。本邦特有の現象にして、國語の一定せるハ國家の獨立なるを代表するに足るべく、斯學の盛衰ハ文學上の關係のみならず、國勢の消長國民の元氣とも、大關係するものぞかし。近年こゝに注意する人々出で、著あるハ眞に慶ぶべき事なり。余も自量らず。夙に此の志を懷き、舊新の書を涉獵し、諸家の説を收拾し、分類順に聊鄙考を運し、つゝ歲月を経し、程に物集高見先生の辭の林を大觀文彦先生の言海を著して、おのゝ卷首に語法を説かれ、其の辭書を使用せむための注意止り、一部の教科書として著述せられしならねば、猶初學のさめには、便宜を歛きたり。是に於きて、余が素志

いよゝゝ進み、いでやと思ひ起しくものから、公私の學務に鞅掌して、荏苒日を涉りつゝ、わづかに稿を脱せし、昨年の冬なりき。然るに、其の頃時疫に罹り、志をらく筆硯に従事おかねて、又々遷延せし間に、學友落合小中村大和田の諸兄も、おのゝゝ文典の著述ありしかを、今にして、六日の菖蒲をひきたる如くなれど、書肆との兼約も破り難く、且、おのが身の程よつけたる苦心を、徒勞よせむも忍び難くて、遂に世よ出す事と、なしたつ。

國語を、外邦の語と區別する要點、主として言語の形體、尾辭の變化を始め、動詞形容詞等の位置、また天仁遠波の關係などよあり。是れらの法だに、本邦固有のものならむに、いか程外來語を混用すとも、國語の格に障る所なし。そもゝゝ中古以後、外來語を使用する事、漸々廣くなりけるが、今日に至りては、吾人思想を充分に顯さむよ、多少、此の外來語に頼らざるを得ず。然るに、從來の著書、其のさだ稀なる、いかよぞや。

國語の法、時代に隨ひて變遷しけるが、本書はまづ平安朝時代を以て、標準としたり。さるゝ奈良朝以前の時代、高古に過ぎ、鎌倉以後の時代の、文法やゝ濫りなれば也。但し、これを語法、すなはち、文脈の繋る所を準則とせし、までよて、當時の古言を復興せむ趣意よ、あらず。

語法の証例、解し易く簡短なるを主とせしかど、文章、前後の關係長きに涉り、短句よて、言意通せざるもありて、引用に便ならねば、まゝ適當なる歌を採れり。

本書よ説ける條々の、繁なるあり簡なるあり、前後詳略、すこぶる不倫なる如くなれど、法格の複雑なる、述義も又隨ひて煩絮なると、必然の理よして、説くべき程の事、言はざるを得ず。強ひて簡短よせむと勉めば、自然疎漏よなるべきを、いかにせむ。

本書よ説ける事ども、新舊を斟酌し、是彼を折衷して、更に排置點綴せし、までなれば、遺漏杜撰も多かるべし。且、一も自家の創見なきを耻づ

れど、偏に初學の便利に供し、斯學の普及を謀らむの微意なり。あそれ、大方の是正もあらば、唯余の幸のみならむや。本書よ就きて、斯學を講習する、教師學生諸君よ。本書の杜撰を訂し、遺漏を補ひつゝ、教へも學びも志給へかし。是れ、余の切に望む所なり。

明治廿四年五月

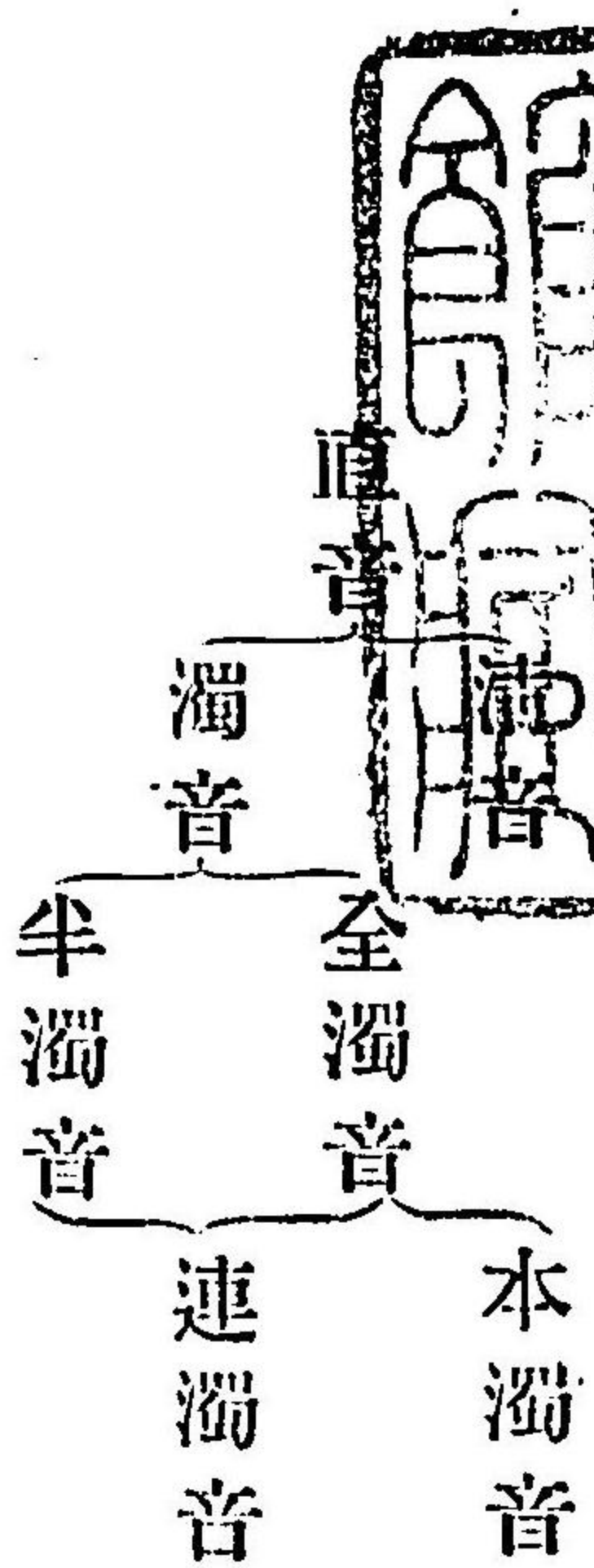
關根正直識

國語學

關根正直著

上篇 音格

文の辭ことばを組立てて成り、辭ハ音を綴りて成る。されば語法を述ぶる前に、音の種類の轉化、その外の事どもを説くべし。そも、吾人の唱ふる音は、直音、濁音、半濁音の二類ありて、れの、清音と濁音との二種にわかれ、濁音は、全濁、半濁の別あり。是れに本濁の格、また、連濁の格と稱ふるあり。



拗音も、右の表に准へて知るべし。

第一章 直音

直音とは、拗音に對して、單一なる音を云ふ。然れども、實ハ父音、母音の密着和熟して、直音の如くなれるなり。故に子音とも云ふ。父音ハ、我が國字を以て、寫すべき様なけれど、まづは「ウ」「ク」「ス」「ツ」「ム」「ユ」「ル」「ウ」の十音に似たるもの、母音ハ、「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の五音と心得て可なり。

第一 清音

清音とは、直音のうちにて、濁音に對し、軽く清める音を云ふ。其の數五十あり。故に之を五十音とも稱す。下に掲ぐる圖に就きて見よ。圖中縦の諸音を行と云ふ。其の首音をとりて、「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の五音を、阿行の音と稱へ、「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」の五音を、加行と稱ふ。又横の諸音を列と稱へ、これも首音をとりて、「ア」「カ」「サ」「タ」「ナ」「ハ」「マ」「ヤ」「ラ」「リ」の十音を、阿列の音と稱へ、「イ」「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「イ」「リ」「非」の十音を、伊列の音と稱ふ。此の他諸行諸列の音、皆これに准へ

	阿行	加行	左行	多行	奈行	波行	麻行	也行	良行	和行
一段	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
二段	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	非
三段	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
四段	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	エ
五段	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

て悟るべし。

此の十行五列の音は、^カ勞この位置を濫る可らず。國語の動詞ハ、皆此の次第に従ひて、其の語尾を變化し、又通音略音等の諸格も、皆この行列に準則するものなれば、能く縦横の音位を心得置くべし。

第二 濁音

濁音とは、清音を濁りて唱ふるものを云ふ。全濁音、半濁音の小異あり。全濁音に變ずる清音ハ、五十音中、加行、左行、多行、波行の四行の諸音とす。然れども、之を標すべき國字なく、唯

清音文字の右肩に二個の小点を付して記號とする例なり。但し平假字にハ濁音を寫せる字あれど、一般にハ用ふる事稀なり。

四

全濁音

加行	カガ	ギギ	ググ	ケケ	ゴゴ
左行	サダ	ジジ	ズズ	ゼゼ	ゾゾ
多行	タダ	ヂヂ	ヅヅ	デデ	ドド
波行	ババ	ビビ	ブブ	ベベ	ボボ

全濁音は本來濁りて唱ふる音と、二言を連ねて一言に唱ふる時、自然に濁るとの別あり。本來濁りて唱ふるを、本濁音と稱ふ。その例左の如し。

くが(陸)	さざ(鷺)	ふぐ(河豚)	かげ(影)
まご(孫)	ひざ(膝)	にじ(虹)	もず(鴟)
かせ(風)	みぞ(溝)	えだ(枝)	ふち(藤)
かへづ(蛙)	たて(蓼)	まど(窓)	さば(鯖)
とび(鳶)	あぶ(蛇)	かべ(壁)	つぼ(壺)

二言を連ね唱ふる時、元來清音なるが、自然と濁るを連濁音と稱ふ。其の例左の如し。

やまがは(山川)	あさざり(朝霧)	あまぐも(雨雲)
まゆげ(眉毛)	ひとごゑ(人聲)	のざは(野澤)
かはじり(河尻)	うすぐみ(薄墨)	ねぜり(根芹)
はなぞの(花園)	やまだ(山田)	たひぢ(旅路)
ゆみづる(弓弦)	やまでら(山寺)	ひらきど(開戸)
れちば(落葉)	かくりび(篝火)	あみぶね(網舟)
うすべり(薄縁)	おちほ(落穂)	

二言を連ねて、一物の名稱とせんには、必、この格に従ふべきなり。例へば「山川」朝霧の類を、原音のまゝに清みて唱ふる時ハ、「山」と「川」と「朝」と「霧」と、各、二物の稱となり、連濁の格に従ふ時は、「山の川」朝の霧の義と聞ゆるなり。是れ連濁音の特性なり。

半濁音とハ、なかば濁る音を云ふ。五十音中半濁音に變ずるは、唯波行の五音のみなり。これも清音字の右肩に、小圈一個を點して記號とする例なり。

半濁音ハ、本來濁りて唱ふるものにあらず。ゆゑに本濁の辭とてハあし。たゞ二言を連ねて唱ふる時、語勢によりて、去か半濁ト成るなり。其の例左の如し。

- くわんぱく(關白) れつひん(列品) ひんぷ(貧富)
- てんぺん(天變) けんぼう(憲法)

第二章 拗音

拗音とは、二個の音を配合して、一勢に唱ふるものを云ふ。例へば「キヤウ」を一勢に唱へて「ケウ」の如く呼び下す類なり。元來固有の國語には、拗音といふものなく、之を寫すべき國字もなければ、直音の假字、二個を配合

して記すを例とす。さて拗音には、也行と和行との別あり。

第一 也行拗音

也行拗音とは、伊列の諸音と、也行の音と配合して成れるものにして、清濁あり。然れども、「イ」と「エ」とは、阿音の類似して柔轉なるが故に、他音に配合するも、密着親和して、直音となり、亦拗音を成すに至らず。仍りて左の圖には省けり。

阿行 イ
 加行 ギキ
 左行 ジシ
 多行 ヂチ
 奈行 ニ
 波行 ビビヒ
 良行 リ

ヤ

阿行 イ
 加行 ギキ
 左行 ジシ
 多行 ヂチ
 奈行 ニ
 波行 ビビヒ
 良行 リ

ユ

阿行 イ
 加行 ギキ
 左行 ジシ
 多行 ヂチ
 奈行 ニ
 波行 ビビヒ
 良行 リ

ヨ

第二 和行拗音

和行拗音とハ、久の音と和行の音と配合して成れるものを云ふ。然れども、和行は喉音ながら硬くして、輕からぬ故に、其の配合圓滑ならず。互に相離れて、一勢に唱へ難し。されば拗音となるもの甚少し。左の如し。

加行
グ
ク
ロ

グ
ク
エ

拗音にも、亦本濁と連濁との格あり。本濁には「ぢやう」(業)「じやう」(情)の類あり。連濁には「そんぢやう」(昌)「あいちやく」(着)「そんぐわん」(官)の類あり。

第三章 音便

音便とは、連音の便により、原音の轉化して他音に響き、又促りもし、添ひもするものを云ふ。其の一例を云と、白キ黒キを白イ黒イと云ひ、暑ク寒クを暑ウ寒ウと唱ふる類なり。但し此の「イツ」の音ハ、もと「キシ」の父音が自然と失せて、餘響の「イツ」のみ残りしなり。この説もあれど、此の外ま

た、語勢によりて、縁なき音に轉ずるも多かり。是れらの音便を、大別して四種とす。

第一 伊音便

キとシとは、轉じて「イ」と響くを常とす。其の左の例證に就きて心得べし。

きさき(后).....を.....きさい..... さきはひ(幸).....を.....さいはひ

於きて.....を.....於いて..... 就きて.....を.....就いて.....

かくれば「キ」の音便は、かならず「イ」とすべきに、世間往々「於イテ」を「於ヒテ」と書き誤るものあり。注意すべし。また、

寒し.....を.....寒い..... 暑し.....を.....暑い.....

近し.....を.....近い..... 遠し.....を.....遠い.....

イハ、又唯添へて唱ふる事あり。其の例左の如し。

まか(詩歌).....を.....まいか

まき(四時)……を……まいじ
 むか(六日)……を……むいか
 かゝる例猶多し。

第二 宇音便

ウ音に轉ずる元音ハ其の數多くあれど、まづ「ク」といふ音の「ウ」となる例より掲ぐべし。さるは此の用世間に甚廣ければなり。

重く……を……重う。 軽く……を……軽う。
 全く……を……全う。 同むく……を……同むう。

斯くの如く「ク」「ハ」「ウ」に轉ずべきを世間大かた「全」「同」「ウ」と書けり。次に「ヒ」音も「ウ」に轉ずる事昔より然り。

思ひて……を……思うて。 謂ひて……を……謂うて
 従ひて……を……従うて。 問ひて……を……問うて

斯くあるべきを今はこれをも誤りて「競フ」「沿フ」「テ」の如く書けり。正し

くハ「思」ヒテ「謂」ヒテ「從」ヒテ「競」ヒテとかくべきなれど、語勢を和めて、音便よせんにハ、何れも「ウ」音に唱へざるべからず。畢竟「ウ」は輕清單一の音なれば、大かたの音ハ、皆この音にうつりて、而もなだらかに聞ゆるなり。是等の例のみならず、「カ」「ハ」「ヒ」「フ」「ハ」「ホ」「マ」「ミ」「ム」「リ」「井」「ヲ」の十二音も「ウ」に轉ずる事あり。其の例、各一を掲げん。

- カの例 かゝぶ(冠)……を……かうぶり
- ハの例 はく(帚)……を……はうき
- ヒの例 いも(妹人)……を……いもうと
- フの例 さぶ(らふ候)……を……さうらふ
- ヘの例 まへ(つぎみ前君)……を……まうつぎみ
- ホの例 なほ(し直衣)……を……なうし
- マの例 たま(はり賜)……を……たうばり
- ミの例 こみ(ち小路)……を……こうち

ムの例 ひむか(日向)……を……ひうが
 リの例 とりでく(取出)……を……とうでく
 非の例 まわで(参出)……を……まうで
 ヲの例 まをす(申)……を……まうす
 ウも又、唯添へて唱ふる事あり。左の如し。

ふふ(夫婦)……を……ふうふ
 ふき(富貴)……を……ふうき
 やか(八日)……を……やうか

次に、近俗の語勢よりして、撥ぬる音と促る音とに轉ずるものを説くべし。

第三 撥呼音便

ヒとミとは、連聲の便により、鼻孔へ洩らして「ン」といふ音に轉ずる事あり、之を撥呼音便といふ。其の例左の如し。

飛びて……を……飛んで 呼びて……を……呼んで
 及びて……を……及んで 結びて……を……結んで

又「ミ」音を「ン」と撥ぬる例は、

噛みて……を……噛んで 汲みて……を……汲んで
 飲みて……を……飲んで 病みて……を……病んで

是れら、口よ唱へんに、如何いかもあれ。文字に寫す時は、必正音の方を書くべし。此の外、「ニ」「ム」「モ」「ハ」「ホ」「リ」の七音も、同じく「ン」音に呼び做す事あり。其の例ハ左の如し。

いかに(如何)……を……いかに
 かなきぬ(金巾)……を……かなきん
 ひむかし(東)……を……ひんがし
 ねもごろ(懇)……を……ねんごろ
 わらはべ(童)……を……わらんべ

ほどほど(殆).....を.....ほとんど
さかり(盛).....を.....さかん

ンも、又、唯添ふる事あり。左の如し。

みな(皆).....を.....みんな
まな(眞字).....を.....まんな
ずハ(不者).....を.....ずんを

第四 促呼音便

「チ」リ「ヒ」三音ハ、語勢の便に依りて、「ツ」音にうつり、急促に呼び做す事あり、之を促呼音便と名づく。其の例左の如し。

立ちて.....を.....立つて 持ちて.....を.....持つて
勝ちて.....を.....勝つて 討ちて.....を.....討つて
是れも「チ」といふ正音の字を寫すを可とす。次に「リ」音の「ツ」にうつる例ハ、
限りて.....を.....限つて 取りて.....を.....取つて

來りて.....を.....來つて 語りて.....を.....語つて

これも「リ」音の正しきに從ふべし。次に「ヒ」音の「ツ」になるは、
思ひて.....を.....思つて 舞ひて.....を.....舞つて
從ひて.....を.....從つて 戦ひて.....を.....戦つて

これも、猶原音の「ヒ」に從ふべきなり。
ツも、又、唯添ふる事あり。左の如し。

もえら(專).....を.....もつへら
もとも(最).....を.....もつとも
またく(全).....を.....まつたく

此の例いと多し。

第四章 音通

音通とは、定まれる條理ありて、五十音中の、同行、同列、互に相通ふ格を云ふ。例へば「チ」、「父」を「テ」、「とも唱へ」「カマ」を「カバ」ともいふ類なり。而して

普通にハ縦通と横通との別あり。

第一 縦通 タテノカヨヒ

縦通とは、同行の縦の音が、彼れ是れ相通するをいふ。中に第四の衣列音が、第一の阿列の音に通ずる辭いと多し。但し是は二語を連合して、一言に呼び做す時に限る。左に其の例證を掲げん。

カ行	……さけ(酒)	さか屋	さか樽
	たけ(竹)	たか帯	たか村
サ行	……かぜ(風)	かざ車	かざ上
タ行	……て(手)	た枕	たな底
ナ行	……かね(金)	かな井	かな物
ハ行	……うへ(上)	うは包	うは面
マ行	……あめ(雨)	あま傘	あま曝
ヤ行	……ひえ(冷)	ひや水	ひや麩

ラ行	……あれ(荒)	あら波	あら磯
リ行	……こゑ(聲)	こわ色	こわ高

斯くいづれの行も、一定の條理に従ひ居るが、自然の格なり。次に第二の伊列音が、第三の宇列、或ハ第四の衣列、第五の於列音に通じ、第三の宇列音が、第五の於列音に通ずる等の、語例を掲げん。

いぬ(夢)	……ゆめ	ぬやまふ(敬)	うやまふ
幾とし(年)	……幾とせ	き(水)の葉	この葉
き(黄)金	……こかね	ひ(火)かけ	ほかけ
かる(居)	……をる	まるし間	まろし
いづこ(何處)	……いづく	まろ雪	まら雪

此の外普通に用ひざる、古言の例ハ、數多けれども省きつ。

第二 横通 ヨコノカヨヒ

横通とは、同列の横音が、彼れ是れ相通するをいふ。中に「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」の五

音と「マ」「ミ」「ム」「メ」「モ」の五音とは、共に唇音なるを以て、すべて相通ふ事一定の格法なり。語例左の如し。

ま。ま。ら。く(暫)……………ま。ば。ら。く	へ。み。(蛇)……………へ。び
た。は。む。れ(戯)……………た。は。ぶ。れ	押。な。め。(並)……………押。な。べ
と。も。し。び(燈)……………と。ほ。し。び	ひ。そ。か(密)……………み。そ。か

また、

う。め(梅)……………む。め	は。づ。か(僅)……………わ。づ。か
あ。れ(吾)……………わ。れ	は。な。す(放)……………は。が。す
け。ち(消)……………け。し	行。か。ね(兼)……………行。が。て

かゝる類枚擧し難し。是等を音通といふ。古書を讀まんにも、又、みづから歌文を作らんに就きて、一渉り心得てあるべき事どもなり。

第五章 略音

略音とハ、自然に一音の省すくかる格をいふ。ままか略りかるには、何れの音も、都

合によりては略くべしやと云ふに、決して然らず。略音には、略かるべき、

天然の規則こそ、存するなれ。其の通則は左の如し。

- 一 阿行の五音「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」は、自然に省略せらる。
- 二 五十音中、第二の伊列音「イ」「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「リ」の八音ハ、省略せらる。
- 三 良行の五音「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」は省略せらる。
- 四 同音の二個重りたる時、其一音ハ省略せらる。

右の定規に従ひ、省略せらるゝ語例あまたあるを、左に掲げて示すべし。

第一 阿行略音の例證

ア……………や。ま。あ。が。た(山縣)……………を……………や。ま。が。た
イ……………あ。か。い。し(明石)……………を……………あ。か。し
ウ……………か。は。う。ち(河内)……………を……………か。は。ち
エ……………か。は。あ。ひ(河合)……………を……………か。は。ひ
オ……………い。づ。い。し(出石)……………を……………い。づ。し

なるうみ(鳴海)……きを……なるみ

エ……これも略かるべき道理なれど、例證を索め得ず。そもく「エ」音の辭は、元來誠に尠ければ、これを得るに縁なしと、先輩も云へり。

オ……かさおき(笠置山)……を……かさぎ山

ふとお(太織)……を……ふどり

かくの如く、阿行五音の、自然と省略せらるゝは畢竟この音は、輕清柔輓なるが故なり。

第二 伊列略音の例證

イ……「イ」音の省かる例は、上の阿行音の所にあれば略す。

キ……やなぎが(柳河)……を……やながは

つばきいち(椿市)……を……つばいち

ときたえ(時絶)……を……ただえ

シ……やまし(山鹿)……を……やまが

あしたち(足立)……を……あだち

のきはし(軒端)……を……のきは

チ……かちどり(楫取)……を……かどり

くちどく(口説)……を……くどく

はちす(運)……を……はす

ニ……かに(樺)……を……かば

はにふ(殖生)……を……はぶ

くにすみ(國栖)……を……くず

ヒ……はやびと(隼人)……を……はやと

いひほ(飯粒)……を……いほ

ちかひごと(誓言)……を……ちかごと

ミ……とま(富山)を……とま

ゆみづる(弓弦)を……ゆづる

まらがみ(白髪)……を……まらが

り……かりの(狩野)……を……かの

まがりたま(曲玉)……を……まがたま

どりどり(鳥取)……を……どり

斯く五十音中、第二列の「イ」「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「リ」八音は、自然と略かる事、古來の例なり。但し也行の「イ」と、和行の「井」との例證を得ざれど、和行の音の重く響く故に省かる事なきなるべし。也行の音は、やく輕清なれば、略かるべき筈なれども、辭少くして、例證を索め得ざるによる。

第三 良行略音の例證

ラ行「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」の略かる例を云はんよ、世俗普通の語には、其の證を見がたし。止むことを得ず、古書の中より引出てつ。

ラ……國遠からば……といふべき所を……遠かば

准らふ……といふ語を……なぞふ

リ……此の音省かる例は上にあり。

ル……かへるさ……を……かへさ

あるめり……を……あめり

レ……それが……を……そが

たれが……を……たが

かれの……を……かの

ロ……こころち(心地)……を……こころち

ところ(所)……を……ところ

よろし(宜)……を……よし

をろがむ(拜)……を……をがむ

第四 同音重複略音の例證

かななべ(金鍋)……を……かな(鼎)

か。を。ら。河原。を。か。を。ら。

と。ど。ま。る。止。を。と。ま。る。

か。か。る。が。ゆ。ゑ。故。を。か。る。が。ゆ。ゑ。

是れらの例證によりて、他をも推し心得べし。

第五章 約音

約音とは、辭の綴りの二音が約りて、一音となれるものにして、謂はゆる反切の事あり。たとへば「アライソ」(荒磯)が約りて「アリソ」となり、「ハタオリ」(機織)が約りて「ハトリ」となる類ひの如し。かく成るにも、然るべき通則あり。そは五十音中の阿行「アイウエオ」の五音が、他の音に重りたる時、その二音は、おのづから約りて、一音となるを例とす。其の證左の如し。

- ア……………さしあげ(指上)……………さくげ(搥)
- もちあげ(持上)……………もたげ(搥)
- た、きあひ(敲を)……………合……………た、かひ(戰)

イ……………わがいへ(我家)……………わぎへ

 わがいも(吾妹)……………わぎも

ウ……………かねうち(金打)……………かねち(鍛冶)

 あらうみ(荒海)……………あるみ

 まうち(馬打)……………むち(鞭)

エ……………此音は、例の辭少くして證を得ず。

オ……………はたれり(機織)……………はどり(服部)

 にしきおり(錦織)……………にしごり

 あさおみ(朝臣)……………あそみ

 とよつおみ(豊臣)……………とよどみ

右の例證を見るに「キア」が約りて「カ」となり、「シア」が約りて「サ」となりたり。他も推して知るべし。斯く阿行「アイウエオ」の五音に、他音の重りたる時、自然と約るハ論な

けれど阿行の音ならぬ、他の音のみ二つ重りて、つひに一音に約ることあり。たとへば「アリヌシ」(在_主)が約りて「アルジ」となり、「コノカタ」(此_方)が約りて「コナタ」となる類ひ是れなり。かゝる辭は、かならず古來謂ひなれし證例あるものに限る。妄に反切すべからず。

第七章 延音

延音とハ、一音を延べて二音に唱へ做す格なり。おほかたの辭は、加行音と、波行音とを語尾とするもの多し。

第一 加行の音を語尾とする例

聞く……を……聞か_く……云ふ……を……云そ_く
申す……を……申さ_く……思へる……を……思へら_く
見む……を……見ま_く……知らぬ……を……知らな_く

第二 波行の音を語尾とする例

歎き……を……歎か_ひ……返し……を……返さ_ひ

笑み……を……笑ま_ひ……足り……を……足ら_ひ
散る……を……散ら_ふ……隠す……を……隠さ_ふ

此の外にもあれど、用例少きの略せり。延音ハすべて約音の反對なれば、彼れと對照して心得べし。

中篇 言格

本邦普通の言語ハ固有の國語と、外來の蕃語との二種なれども、形體の上より區別すれば、れほよそ左の三類に歸す。

壹 體言

貳 活用言

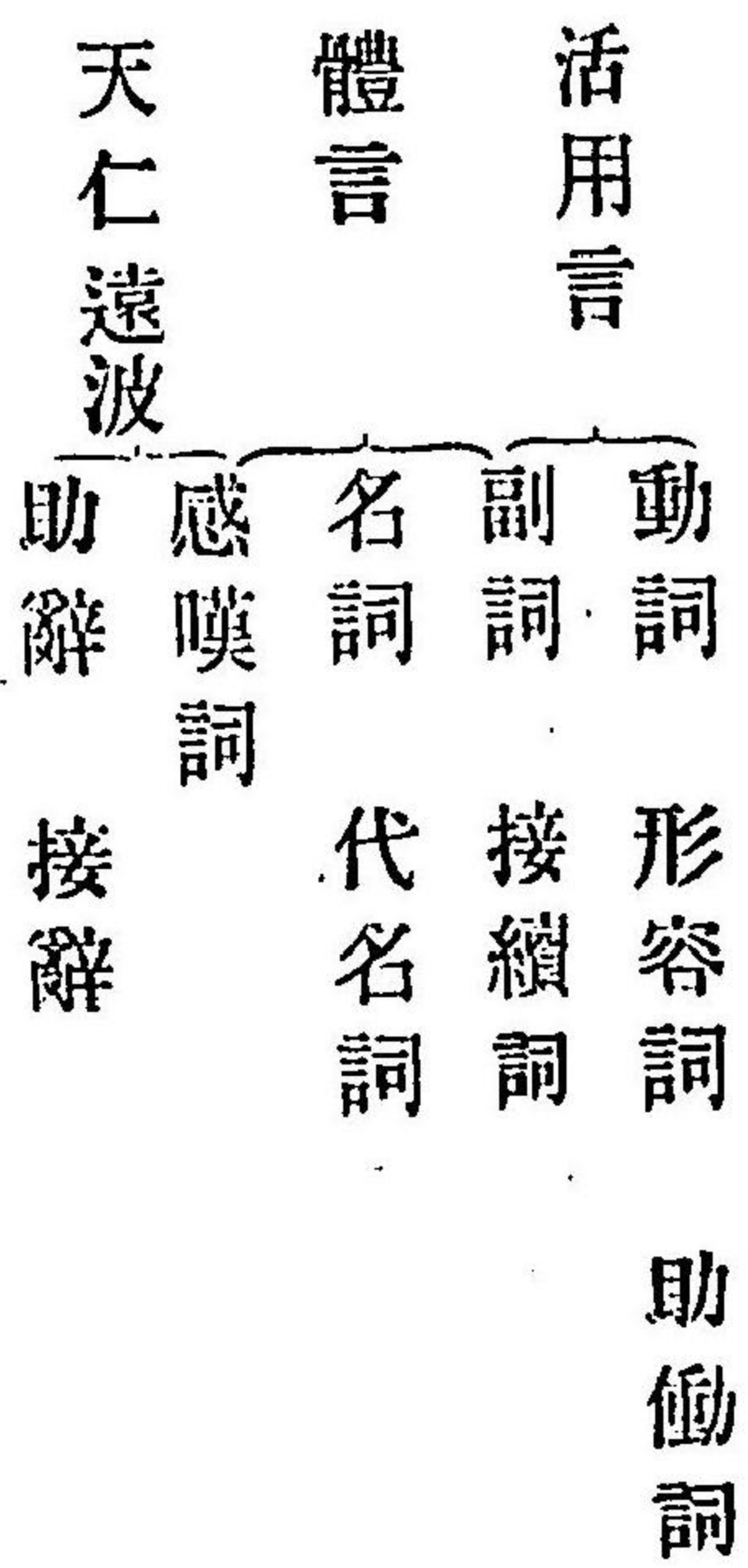
參 天仁遠波

扱又性質に就きて區別すれば、れほよそ左の十種となる。

- | | |
|-------|-------|
| 一 名詞 | 二 代名詞 |
| 三 接續詞 | 四 副詞 |
| 五 動詞 | 六 形容詞 |
| 七 助働詞 | 八 感嘆詞 |
| 九 助辭 | 十 接辭 |

此の十種の中にて、名詞と代名詞とハ、總べて體言に屬し、動詞と形容詞

れよび助働詞とは、總べて活用言に屬し、助辭と接辭とは、天仁遠波に屬し、接續詞と副詞とは、體活兩言に屬し、感嘆詞は體言と天仁遠波とに屬し、すなはち左の如し。



まづ體言の部より始めて、それに屬する辭の性質を説くべし。

第壹 體言之部

體言は、眞體言、假體言の二類にわかる。

一 眞體言

眞體言ハ、本然の體言とも云ふべくして、語尾の變化せざる辭なり。此の中に、固有の國語と、外來の蕃語との二種あり。固有の國語とは、「山川春秋」我「汝」などいふ類の辭にして、外來の蕃語とは、「寺」「郡」などいふ、韓語と、「罽迦」「伽藍」などいふ梵語と、方今廣く通用する、「忠」「孝」「仁」「義」「學問」「修業」などいふ漢語等なり。是れらは、總べて語尾を變化する事なし。若し西洋の辭を、我が國文の中に雜へ用ひんに、又、此の眞體言の格に從ふべきなり。

二 假體言

假體言ハ、活用言の語尾を云据ゑ、又は別に尾辭を添へもして、假に體言となしたる辭なり。抑、活用言とは、語尾の變化する辭にて、例へば「讀む」といふ辭の、「讀ま」「讀み」「讀む」「讀め」と變化し、「書く」といふ辭なれば、「書か」「書き」「書

く「書け」などいへる、「マ」「ミ」「ム」「メ」、「カ」「キ」「ク」「ケ」と變る所を語尾と稱へ、其の變
ることを活用と稱ふるなり。而して假體言の中に、動詞より轉成する辭
と、形容詞より轉成するとの二つあり。

動詞より轉成する辭とは、例へば「舞ふ」といふ動詞を「まひ」と云据ゑ、また
「勤む」といふを「つとめ」と云据ゑ、また「歸る」といふに「さ」の尾辭を添へ「かへ
るさ」とも云ひて、假に體言と成したる類あり。形容詞より轉成する辭と
は、例へば「高深」などいふに「さ」を添へて「高さ」「深さ」と云ひ、「青赤」などいふに、
「ミ」を添へて「青み」「赤み」とも云ひて、假に體言と成したる類なり。

そも、動詞形容詞の活用は、種々あれど、假體言となるには、概則三つ
あり。其の一、五十音圖中、伊列「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「イ」「リ」「井」の音を語尾とし、其の
二、同圖中衣列の「エ」「ケ」「セ」「テ」「ネ」「ヘ」「メ」「エ」「レ」「エ」の十音を語尾とし、其の三、「ミ」「ム」
の二音を尾辭とする事是れなり。其の證例左の如し。

(一) 伊列音を語尾とする例

- イ ○「イ」音を語尾とする辭は本邦に
なき格なれば、語例掲げがたし
- キ なげき(歎) れもむき(趣)
- シ うつし(寫) もよほし(催)
- チ かち(勝) はぢ(耻)
- ニ うまに(甘藪) そらに(空似)
- ヒ うたひ(謠) あきなひ(商)
- ミ うらみ(怨) めぐみ(愚)
- イ むくみ(報) くみ(悔)
- リ そしり(譏) つり(釣)
- 井 すまね(住居)

(二) 衣列音を語尾とする例

- エ こくろえ(心得)
- ケ たすけ(助) さまたげ(妨)

セ れほせ(仰) 去らせ(令知)
 テ そだて(育) くはだて(企)
 子 かさね(重) たづね(尋)
 ヘ をし(教) こた(答)
 メ 去づめ(鎮) いさめ(諫)
 エ れほえ(覺) つひえ(費)
 レ けがれ(穢) つかれ(勞)
 エ うゑ(飢) たうゑ(田植)

(三) 左美の二音を語尾とする例

サ いる(入)さ かへる(歸)さ
 どほ(遠)さ うれし(嬉)さ
 ミ あつ(厚)み れもしろ(面白)み

右に掲げし例は總べて名詞なれど副詞、接續詞等にも體言なるが多し。

第一章 名詞

名詞ハ有形無形の事物、れよび數量等の名稱なり。例へば「月花鳥獸黑筆」勤怠「二」教師「生徒」等の如し。而して、人また物の數あるを顯すに、左の辭を添ふる事あり。もはら人に附くハ、

たち 親たち 君たち 友たち の如し
 ばら 女ばら 殿ばら 奴さらの如し
 ら 武士ら 少女ら 妻らの如し

人また物に附く稱ハ、

ども 男ども 舟ども 馬ども 事ども 調度ども
 など 童など 御供などもなく 菓物など取出て

右の中「ら」「ど」「な」などは其數の複れるにも云ひ、又其の外にあるを略するにも用ふる辭なり。

第一 連合名詞

名詞は、二個以上の辭を連合して、謂はゆる熟語とする事あり。例へば「春霞」[秋風]「山寺」などの如し。夫か連合するにも、國語のみの連合あり。蕃語との連合あり。又眞體言假體言等、打雜りて連合するなど、種々の例あり。

(一) 眞體言のみ連合せる名詞

あさゆふ(朝夕) すみふで(墨筆) とりけもの(鳥獸)
やまかは(山川) いしをじ(石橋) うらおもて(裏表)

(二) 假體言のみ連合せる名詞

かきとり(書取) よりあひ(寄合) かさねぎ(重着)
みこみ(見込) ついたて(衝立) さしぬき(指貫)

(三) 眞體言と假體言と連合せる名詞

ふでたて(筆立) ゑりまき(襟卷) けぬき(毛拔)
かちとり(掛取) うしかひ(牛飼) とりさし(鳥刺)

おちば(落葉) かれくさ(枯草) うつしゑ(寫繪)

かりうど(獵人) つりざを(釣棹) なきがほ(泣顔)

(四) 蕃語のみ連合せる名詞

ちうせつ(忠節) かうかう(孝行) にんじやう(人情)
げいのう(藝能) ぶんぐわく(文學) ぎあゆつ(技術)

(五) 固有語と外來語と連合せる名詞

ゆどう(湯桶) ひまち(火鉢) いまやう(今様)
さうを(相場) だいどころ(臺所) あかだな(阿迦棚)

(六) 形容詞に連合せる名詞

とほやま(遠山) ひろよへ(廣庭) あさせ(淺瀬)
ちかどなり(近隣) うすごほり(薄水) あつぎ(厚着)

此の外なほ形容詞のみ連合して、一種の連合名詞となれる「遠淺」「細長」服衣類の如き類あり。又形容詞に、外來語の連合して、「白菊」「黒椀」などいへる類

もあれど、辭多からず。

第二章 代名詞

代名詞ハ、名詞に代へて用ふる辭なり。之をれほよりに分ちて、人稱代名詞、普通代名詞、指示代名詞の三つとす。

第一 人稱代名詞

人稱代名詞は、人の稱呼に代ふる辭なり。さて此の辭を四等に分ちて、己が名に代ふるを、自稱と名づけ、己れに對する他人の名に代ふるを、他稱と名づけ、自他二人の間に語り出づる、別人の名に代ふるを、別稱と名づけ、又何某と知らぬ人、また誰と定めぬ人に代ふるを、不定稱と名づく。左の表に就きて心得べし。

自稱	他稱	別稱	不定稱
われ	なむぢ	かれ	たれ

此の外に「私」「己れ」や「つがれ」「わらへ」「僕」「妾」以上「君」「ぬし」「和殿」「和主」「其許御」「許御

身「御事」^{以上}他稱などいふ類ひ多くあり。中に就きて「我れ」「己れ」の二つハ、元來自稱なれど、ある時ハ他稱にも用ふることあり。又「君」「僕」などいふ辭は、もと名詞なるが、人を敬ひ、己れを卑下する意より、代名詞に轉用するなり。

第二 普通代名詞

普通代名詞ハ、事物、場所、方位等をあらはす辭にして、最近きを近稱とし、聊、離れたるを中稱とし、遠きを遠稱とし、それと定まらぬを、不定稱と名づくる四等に分つ。左の如し。

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、 か、かれ、	い、づれに
場所	ここ	そこ	あし、ここ	いづこ
方位	こなたち	うりなち	あなち	いづち

第三 指示代名詞

指示代名稱ハ、名詞の上よありて、其の名詞を指示を辭なり。例へを「この君」その花かの奴いづれの兒の如し。これを、近、中、遠、および不定稱の、四等に分つ。

近稱	中稱	遠稱	不定稱
この	その	かあの	いづれの

是れらの代名詞ハ、元來「あ(吾)」「な(汝)」「た(誰)」「こ(是)」「そ(其)」「か(彼)」などいふが本然の辭にして「れ」「の」添へて「云ふ音」の「と」が「と」は助辭なり。代名詞も、人、また、物の數あるを顯すに「たち」ども「ら」等の辭を添ふる事、名詞にれなし。

第三章 接續詞

接續詞は語句の間にありて、上下を接續する辭なり。此の辭を本體と變體とに分つ。

第一 本體

本體とは、本然の接續詞にして、語尾の活用せざる辭の類ひを云ふ。すなはち、左の如し。

また(又) かつ(且) そもく(抑)
 さて(扱) ゆゑ(故) すなはち(則)

第二 變體

變體とは、動詞に助辭の添ひて、自然に接續詞となりしものなり。其の例左の如し。

然らむ さらば 然れば されば
 然れど されど 然るに ざるよ
 次いで 依りて 隨ひて 並びよ

此の外「かくて」而して「然のみならず」是に於いて「などの如き」一成句にて、接續詞となれるもあれど、極めて多からず。

第四章 副詞

副詞は、動詞形容詞、または副詞にも副ひて、其語意を種々に云顯すに用ふる辭なり。例へば「花ハ美しく咲ク」極めて「高き山花ハ極めて美しく咲けり」などの如し。

副詞は、また直に動詞等に副はざる事あり。例へば「暫ク時の到るを待て」つら／＼由來を考ふるよ」かならず注意を怠るな」などの如し。是れ語句を隔て、下の辭にかゝれるなり。さて此の辭も、本體と變體とに分つ。

第一 本體

本體の副詞との語尾の變化せざるものをいふ。すなはち左の如し。

たゞ(唯)	もたら(專)	かならず(必)
みな(皆)	もとも(最)	すこぶる(頗)
なほ(猶)	まばし(暫)	あたかも(恰)
あゝ(豈)	けだし(蓋)	れほむね(概)

第二 變體

變體の副詞とは形容詞より轉成せしと、名詞、動詞、形容詞に、助辭の添ひて、副詞となりし辭どをいふ。其の類をおほよそに分ちて、三つとす。

(一) 形容詞より轉成せし副詞

遠く	近く	早く	遅く	高く
嬉しく	宜しく	美しく	楽しく	烈しく

是れらの、元來「遠し」「遠き」「樂し」「樂しき」なども、活用する辭にて、形容詞中の一格なり。委しく、後に説くべし。

(二) 「に」といふ助辭の添へる副詞

時に	爰に	更に	誠に	常に
妄に	試に	始に	巧に	頻に
明に	暖に	静に	速に	遙に
優に	嚴に	闊に	酷に	妙に

(三) 「て」といふ助辭の添へる副詞

總べて 甫めて 極めて 敢へて
却りて 強ひて 兼ねて 定めて

此の外「素より」「いかで」「いかでか」「譬へば」「謂を」といそんやの如き、また「早々」「數々」「仄々」「細々」「能々」「なくなく」「とりとり」「かへすく」の如く重ねる格あり。又外來語にも「日々」「夜々」「年々」「歳々」の如く重ねるあり。又「一切」「大概」「到底」「畢竟」などいふ類ひ、又「恬」として「顧みず」「寂」として「音なし」「頑」として「聞かず」などいふ類ひも、皆副詞なり。

第三 副詞の意趣

副詞の言狀は、れほかた右の如し。而して更に其の意趣を尋ねれば、時節、位置、情意等を顯し、又聲容、形體等をも寫せる副詞あり。左に大別の例を掲ぐ。

時節 今 昔 昨日 今年 早く 遅く
位置 爰に 其處に 何處に 何方に

形状	圓く 平かに 細長く 稜だちて
情意	嬉しく 楽しく 快く 懇に
聲音	朗に 爽かに ほとと からくと
容色	うるをしく 花やかに 紅に 青々と
順序	まづ やうやく 次に 次第に
度量	聊 甚 頗 僅に 毫も いと
希望	いかで 願くを 何卒
推量	若 蓋 よも 恐らくハ
反復	猶 彌 志をく 頼りに
集合	皆 すべて 共に れほよそ
特別	唯 獨 殊に 別きて
反動	豈 却りて いかでか
疑念	何故 などでか など

許諾

げに うべ

此の外、猶多かるべきを、さまでは尋ねずして止みぬ。

第貳 活用言之部

活用言とは語尾の變化活用する辭なり。此の類に屬する辭を、性質より分けて、動詞、形容詞、助働詞の三種とす。但し助働詞ハ、舊來の分類法にてハ、天仁遠波の中としたれど、言形上より云へば辭尾の變化あり、性質上より云へば、法あり時ありて、全く動詞、形容詞に同むければ、今活用言の部に收めつ。

活用言の辭尾を變化する規則ハ、總べて一様なりやと云ふに、然らず。異同に就きて類別すれば、其の種類は、正格、變格を合せて、左の十種あり。

- 一 四段活用言
- 二 上二段活用言

正格

- 三 下二段活用言
- 四 上一段活用言
- 五 下一段活用言
- 六 加行變格活用言
- 七 左行變格活用言
- 八 奈行變格活用言
- 九 良行變格活用言
- 十 音雜格活用言

變格

以上互に活用の狀を異にせり。是れより逐次説明すべし。

一 四段活用言

四段活用言とハ、此の種の辭は、總べて五十音の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段列に、變化するよ、因りて、然名つくすなはち、

(書)か

き

く

け

(加行)

(推)さ	し	す	せ	(左行)
(立)た	ち	つ	て	(多行)
(習)え	ひ	ふ	へ	(波行)
(讀)ま	み	む	め	(麻行)
(釣)ら	り	る	れ	(良行)

右、四段に變化する辭は、加左多波麻良の六行音のみにして、此の他の行に渉る事なけれど、此の類の辭、通用最廣し。扱括弧の中に「書推立」等の字を記したるは、唯一辭を出し、くまでなり。下に「かきくけ」又「さしすせ」等と記したるは、此の外、咲増打等、いづれの辭をも、これに云ひかけて、心得させんためなり。以下の表も之に倣(なま)る。

二 上二段活用言

上二段活用言とは、此の種の辭は、すべて五十音列の上の方、伊字二段の列に變化すればなり。而して、*イ、エ、ウ、ク、ケ、カ、キ、ク、ケ、カ、キ* の如きものなり。

(起)き	く	くる	くれ	(加行)
(落)ち	つ	つる	つれ	(多行)
(強)ひ	ふ	ふる	ふれ	(波行)
(恨)み	む	むる	むれ	(麻行)
(悔)み	ゆ	ゆる	ゆれ	(也行)
(懲)り	る	るる	るれ	(良行)

此の種の辭には、阿、左、奈、和の四行音に變化するものなし。扱「るれ」の二音は、唯、添へるにて、活用にあらず。元來良行の音は、固有語に、綴りの頭となる事なく、又四段活用言を除きては、正格諸活用言の下に附くが通則なる故、此の活用言は「きく」の二段音のみに就きて、然名つけしなりけり。以下の辭も、此の例に准ぜよ。

三 下二段活用言

下二段活用言とは、此の種の辭は、總べて五十音列の下の方、衣字二段の

列に變化すればなり。

(得)え	う	うる	うれ	(阿行)
(受)け	く	くる	くれ	(加行)
(失)せ	す	する	すれ	(左行)
(捨)て	つ	つる	つれ	(多行)
(兼)ね	ぬ	ぬる	ぬれ	(奈行)
(添)へ	ふ	ふる	ふれ	(波行)
(集)め	む	むる	むれ	(麻行)
(消)え	ゆ	ゆる	ゆれ	(也行)
(枯)れ	る	るる	るれ	(良行)
(植)ゑ	う	うる	うれ	(和行)

此の種の辭ハ、五十音の十行とも總べてに涉りて洩るゝ行なし。

×四 上一段活用言

上一段活用言とは、此の種の辭は、五十音列の上の方、伊列のみ唯一段の活用にして、是れに例の「るれ」の添ひたるなれば、然名つけしなり。

い(射)	いる	いれ	(阿行)
き(着)	きる	きれ	(加行)
に(似)	にる	にれ	(奈行)
ひ(干)	ひる	ひれ	(波行)
み(見)	みる	みれ	(麻行)
お(居)	おる	おれ	(和行)

此の種の辭は、左多也、良の四行に活用するものなし。又右に掲げたる辭の外、此の活用に入るもの極めて少し。

五 下一段活用言

下一段活用言とは、五十音列の下の方、衣列のみ唯一段の活用にして、例の「るれ」の添ひたるものなり。

け(蹴)	ける	けれ	(加行)
ね(寤)	ねる	ねれ	(奈行)
へ(綜)	へる	へれ	(波行)

此の種の活用は、右に出せるより外に辭なし。中に「蹴る」といふ辭は、元來「くゑくう」と活用せしものなるが、いつしか轉じて、現今は下一段に活用せるなり。又「寤る」「綜る」といふ辭は、現今用ふる事稀なれば、後の圖には掲げず。

以上を正格としも云へるの、活用の格より、助働詞、助辭等の連續法まで、何れも一齊にして、規則正しければなり。此の外、格法の僅に變りたる辭、七つ八つあり。正格に對して變格と稱す。委しき事ハ、つぎぐに説くべし。

(六) 加行變格活用言

加行變格活用言は、「來」といふ辭、たゞ一つあるのみ。語尾活用の狀、左の如し。

こ(來)	き	く	くる	くれ
------	---	---	----	----

正格の諸活用言中には、五十音の第五段なる、於列の音に活用する例なきに、此の辭に限りて、こと唱ふるが、變格たる所以なり。且又助働詞連續の法にも、正格と異なる點あれど、委しくハ後に説くべし。

七 左行變格活用言

× 左行變格活用言ハ、「爲」といふ辭と、「御坐」といふ辭との二つなり。中に「爲」といふ辭は、或る名詞に續きて、「霞す」「詠す」「孝す」「修業す」「學問す」の如く云ひ、現今世に通用する事極めて廣し。

せ(爲)	し	す	する	すれ
------	---	---	----	----

此の種の辭ハ、左行第四段なる「せ」音まで活用して、第一段の「さ」音に唱ふる事なきが、正格諸言中に、其例なきのみにあらず、前の加行變格とも、其の趣を異にせり。且又助働詞連續の法にも、變格たる所あれば、別に一の

け(蹴)	ける	けれ	(加行)
ね(寤)	ねる	ねれ	(奈行)
へ(綜)	へる	へれ	(波行)

此の種の活用は、右に出せるより外に辭なし。中に「蹴る」といふ辭は、元來「くゑくう」と活用せしものなるが、いつしか轉じて、現今は下一段に活用せるなり。又「寤る」「綜る」といふ辭は、現今用ふる事稀ければ、後の圖には掲げず。

以上を正格としも云へるの、活用の格より、助働詞、助辭等の連續法まで、何れも一齊にして、規則正しければなり。此の外、格法の僅に變りたる辭、七つ八つあり。正格に對して變格と稱す。委しき事ハ、つぎぐに説くべし。

(六) 加行變格活用言

加行變格活用言は、「來」といふ辭、たゞ一つあるのみ。語尾活用の狀、左の如し。

し。
こ(來) き く くる くれ

正格の諸活用言中には、五十音の第五段なる、於列の音に活用する例なきに、此の辭に限りて「こ」と唱ふるが、變格たる所以なり。且又助働詞連續の法にも、正格と異なる點あれど、委しくハ後に説くべし。

七 左行變格活用言

× 左行變格活用言ハ、「爲す」といふ辭と、「御坐」といふ辭との二つなり。中に「爲」といふ辭は、或る名詞に續きて「霞す」「詠す」「孝す」「修業す」「學問す」の如く云ひ、現今世に通用する事極めて廣し。

せ(爲) し す する すれ

此の種の辭ハ、左行第四段なる「せ」音まで活用して、第一段の「さ」音に唱ふる事なきが、正格諸言中に、其例なきのみにあらず、前の加行變格とも、其の趣を異にせり。且又助働詞連續の法にも、變格たる所あれば、別に一の

變格と去たるなり。

八 奈行變格活用言

× 奈行變格活用言ハ「往ぬ」と「死ぬ」どの二つあるのみ。

(往)な に ぬ ぬる ぬれ

此の種の辭ハ、正格四段の活用言と、粗同じ。僅に異なる點を云はんは、四段活用言の例は「な」「ぬ」「ね」と變化するを、是れは別に「ぬる」「ぬれ」の二活用あり。仍りて變格とは云へるなり。

九 良行變格活用言

× 良行變格活用言は「在り」「居り」「待り」等の數言に過ぎず。

(在)ら り る れ

此の種の辭も、正格の四段活用言に、全く異ならず見ゆれど、正格の良行四段活用言ハ、斷言法の辭を「釣る」の如く「る」を語尾とし、此の活用言は「在り」の如く「り」を語尾とす。次項に掲ぐる表に就きて、斷言法の所を比べ見

よ。又助働詞助辭の連續法にも、正格と異なる所あり。後に説くべし。

十 音雜格活用言

音雜活用言とは、五十音のうち、加行の音と左行の音と、打雜りて活用する故に然名づく。これに單活用と、複活用との差別あり。左の如し。

(善)く し き けれ (單活用)

(惡)しく し しき しけれ (複活用)

單活用の辭は「く」「し」「き」と單一ノ尾辭を變化するも仍り、又之を「久志幾」の活用とも稱す。複活用は「しく」「しき」「しけれ」と活用の音重複するにより、又之を「志久志幾」の活用とも稱す。

以上十種の活用言を性質に就いて分くる時は、四段活用言より良行變格に至る迄は、悉く動詞にして、音雜活用言のみは、形容詞なり。助働詞の活用に至りてハ、其狀、動詞、形容詞と同じ様なれば、爰に取出ては掲げず。委しくハ助働詞の條に就きて知るべし。

第一章 動詞

動詞ハ種々の動作、状態等を云ひ顯す辭なり。例へば「鳥飛ぶ」「犬走る」の如きハ、動物の所作を顯し、また「海上に舟あり」「形木の葉に似たり」の如きは舟の現象を云へるが如し。

第一 動詞の法

動詞は語尾の變化活用するに就きて、言意に種々の差別を生ず。例へば「書く」は現在の動作を云ひ、「書け」ハ命令の意を顯す類の如し。かゝる言ひかたを、動詞の法と名づけて、七種あり。

- 一、斷言法
- 二、連名法
- 三、既然法
- 四、將然法
- 五、熟語法
- 六、重言法
- 七、命令法

左に一圖を掲げて、語尾の變化と、法の次第とを示さむ。

		變格行	變格行	變格行	變格行	下二段	段 一 上	段 二 下	段 三 上	段 四			
現 在	ハ、モの結	在り	死ぬ	す	く	蹴る	居る 見る 干る 似る 着る 射る	植う 枯る 消ゆ 響む	重ぬ 捨つ 失す 受く 得(う)	戀る 悔ゆ 恨む 強ふ 落つ 起く	釣る 讀む 飛ぶ 立つ 推す 咲く	斷言法	第一階
	ヅ、ヤの結	ある	しぬる	する	くる	ける	おる みる ひる にる きる いる	ううる かるる きゆる ほむる	かさぬる すつる うする うくる うる	こるる くゆる うらむる しふる おつる おくる	つる よむ とぶ たつ あす さく	連名法	第二階
	コ、ソの結	あれ	しぬれ	すれ	くれ	けれ	おれ みれ ひれ にれ きれ いら	ううれ かるれ きゆれ ほむれ	かさぬれ すつれ うすれ うくれ うれ	こるれ くゆれ うらむれ しふれ おつれ おくれ	つれ よめ とべ たて あせ さけ	既然法	第三階
	未來	あら	しな	せ	こ	け	おみひにきい	うかれ きえ ほめ	かさぬ すて うせ うけ え	こり くみ うらみ しひ おち おき	つら よま とば たた あさ さか	將然法	第四階
	過去	あり	しに	し	き	け	おみひにきい	うかれ きえ ほめ	かさぬ すて うせ うけ え	こり くみ うらみ しひ おち おき	つり よみ とび たち あし さき	重熟言語法	第五階
		あれ	しぬ	せよ	こ、こよ	けよ	おみひにきい よ	うかれ きえ ほめ	かさぬ すて うせ うけ え	こり くみ うらみ しひ おち おき	つれ よめ とべ たて あせ さけ	命令法	第六階

手紙

第一階斷言法 是ハ動詞の本體とも云ふべく、單に動作の何たるを述べて、語句の段落を結ぶ法なり。換言すれば、詞の斷れ目と成りて、下の句に續かざる辭をいふ。されば舊來截斷言とも、終止言とも名づけたり。其の用法は、

花咲く 人立つ 車を推す 書を読む

義を解く 恩を報ゆ 學を勉む 外套を着る

通例の語句にハ第一階の辭(斷言法)を以て、語句の末を結ぶべきなれど、若し文中上の辭に「ぞ」「や」「か」の類の助辭添へる時は、第二階の辭が斷言法となりて、其の句の末を結ぶ例なり。左の如し。

花ぞ咲く 鳥や飛ぶ 氷や解くる 光ぞ消ゆる
 人や來る 怨やする 今ぞ往ぬる 誰れかある

又若し上の辭に「こそ」といふ助辭の添へる時は、第三階の辭が斷言法の辭に代りて、其の句の末を結ぶ法なり。

Notice

Notice

花こそ咲け

鳥こそ飛べ

瀧こそ落つれ

影こそ失すれ

姿こそ似れ

月をこそ見れ

かくの如く、「ぞ」「や」の類に應ずるに、第二階の辭を用ふるは、動詞のみならず、形容詞、および助働詞も、又皆然り。之を「係り結び」と稱して、文法上の一法則たり。委しくは末に説くべし。
第二階、連名法、 是は、名詞、れよび代名詞の上に連りて、形容詞の如くなる辭なり。もと連體言と名づけたれど、體言のうちにて、唯、名詞代名詞よ連るのみ、接續詞副詞の如き、他の體言よ連る事なければ、打まかせて、連體とを稱し難くや。仍りて連名法と改めつ。

咲く花

立つ浪

飛ぶ鳥

落つる瀧つ瀬

重ねる袖

着る物

來る人

往ぬる年つき

此の辭ハ、又、下なる名詞などを、略する事あり。
死ぬる(事)と生くる(業)といづれか難き

往く(者)を送り來る(人)を迎ふ

是れらに准じて、他を推知すべし。

第三階、既然法、 是ハ、文字の如く、既よ、然なれるをいふ法なり。但し「ほ」といふ助辭を添へざれば、其の態を成さず。

梅咲けば鶯來鳴きぬ

風吹けば花も散り行く

早く起くれば快し

衣を着れば寒からず

咲けばは、既に咲ける花の、今も猶ある事なり。されば此の法の辭は、過去より、現在に涉れる動作、および状態を顯す辭なりけり。
此の辭は、また、ある時を、何々するに依りて「の意を顯す事あり。古歌に、
都へと思ふも物の悲しきハ、還らぬ人のあれば也けり
とある類是れなり。

第四階、將然法、 是も、文字の儘に、將に然せんとする意を、顯す法にて、是れを「たば」といふ助辭を添ふ。

梅咲かば鶯來鳴かむ 風吹かば花も散らむ
學を勤めば智識を得む 多く書を見れば益あるべし

かく勤めば見ばと云ふは、いまだ其事を爲さず、是れよりせんとする意にて、上の既然法とは、時に前後の差別あり。されば此の法の辭に「むまし」などいふ、助働詞を添ふる時は、未來の辭となるなり。委しくは後に説くべし。

第五階熟語法

是ハ舊來連用言と名づけしものにて、他の活用言に

連續して、一の熟語となる法なり。例へば「咲き」と「句ふ」とを連續して「咲き句ふ」となり、「推し」と「行く」とを連續して「推し行く」の一熟語となるが如し。

立ち止る

起き上る

受け取る

見渡す

蹴返す

死に失す

二言を連續するのみならず、三言なるもあり。

見廻り行く

書き付け置く

見離し給ふ

讀み上げ奉る

又動詞のみならず、形容詞の活用言にも連續す

讀み善し

解き易し

有り難し

見苦し

立ち憂し

捨て置き難し

かゝる類尙多かり。

重言法、 是は熟語法の辭と言狀同じけれど、用法によりて、其意を異

にす。

花飛び蝶駭く

月落ち鳥鳴きて霜天に滿つ

水を望み山を尋ぬ

鳥啼き花落ちて水空しく流る

霞立ち木の芽もえる

今朝來鳴きいまだ旅なる時鳥

是れらの例を味ひて、熟語法との差別を知るべし。從來此の種の辭を、熟語法の辭と混同して、連用言と名づけしは精しからず。咲きと「句ふ」とを連合して、一の熟語となしたると、「花飛び蝶駭く」の如く、彼れハ飛び是れ

は駭く各自に働きたる辭とは、其の用法全く異なり。畢竟するに、此の法の辭ハ、各別の動作、状態を、打重ねて言ふ時に用ふる法なれば、重言法と名づけし也。

此の法の辭に「きたりけり」等の助働詞を添ふる時は、過去の辭となる。それは例の後に説くべし。

第六階、命令法 是は、他に向ひて動作を命令する法なり。

書を習へ 文を讀め 疾く往ね 前に居れ

仰ぎ見よ 打捨てよ 學を勤めよ 勉強せよ

此の法は、四段活用言、および奈行、良行の二變格を除きて、その他の動詞ハ、皆「よ」といふ助辭を添ふべきなり。但し加行變格の辭も、古くハ「よ」を添へざりき。前の圖を見れば、おのづから明瞭なるべし。

第二 動詞の性

動詞は、れのづからなる動作、状態を顯す辭と、他に及ぼすものと、又我れ

に受くると、人をして動作せしむると、其の性質種々あり。これを動詞の性と名づく。今動詞のあらゆる性を、左の七種に區別す。

- 一、自動詞
- 二、他動詞
- 三、能動詞
- 四、受動詞
- 五、役動詞
- 六、被役動詞
- 七、崇敬動詞

右のうちにて、能動詞以下は、いづれも助働詞を借りて、其意を顯す事なるが、其の助働詞の活用は、尋常動詞の下二段活用言と、毫も異なる所なし。且、是れらの諸動詞は、自他の動詞と、同類のものなれば、爰に叙てつ。

入 (一) 自動詞 是ハ、自然の状態、および動作を顯す辭にして、更に他の關係なきものをいふ。例へば、「鳥鳴く」「人立つ」「花落つ」などの如く、「鳴く」と云ひ「立つ」といふ、其の儘よて通ずる辭なり。

入 (二) 他動詞 是ハ、他の事物に、及びかゝる動作を顯す辭よして、例へば、「童子ハ犬を打つ」「蛛ハ巢を結ぶ」「鶏ハ時を告ぐ」などの如し、「童子ハ打つ」「蛛

「結ぶ」などのみありては、語意通ぜず。必、何を云々すと、他の事物と關係を
もてるものを云ふ。

自動、たよび他動の辭ハ、其の性によりて、たのく活用を異にす。すな
ち、左の如し。

自動詞	他動詞
續かむ	續けむ
伏さむ	伏せむ
立たむ	立てむ
従はむ	従へむ
進まむ	進めむ
止らむ	止めむ

この對照圖ハ、動詞の(第四階)將然法の辭
を掲げつ。活用相異の點を、心得易からし
めむため也。以下も之に准ぜよ。

右は、自動詞は四段活用言にして、他動詞は下二段なり。而して此の例と、
全く反對なるあり。左の如し。

自動詞	他動詞
開けむ	開かむ
消えむ	消さむ
覺めむ	覺さむ
折れむ	折らむ

右は、自動詞は下二段活用言にして、他動詞ハ四段なり。而して、又自動詞
の、上二段活用なるもあり。左の如し。

自動詞	他動詞
起きむ	起さむ
落ちむ	落さむ
延びむ	延さむ
懲りむ	懲さむ

此の外「干る」の如く、自動詞の上一段活用なるあり。「見る」の如く、他動詞の

上一段活用なるもあり。かゝれば、自動詞は何活用言にして、他動詞へ某活用言なりと、一様一定のものにあらず。故に自他の性は、往々其の區別を濫る事あり。注意すべし。

能動詞以下は、前にも云へる如く、助働詞に連りて、其の性を顯すなるが、それらの助働詞は、下二段活用言と、毫も異なる所なし。左の如し。

能動詞 受動詞	る	らる	れる	られ	られ	(れよ)
	らる	らる	らる	られ	られ	(られよ)
役動詞	す	する	すれ	せ	せ	せよ
	さす	さする	さすれ	させ	させ	させよ
能動詞 受動詞	せむ	せむる	せむれ	せしめ	せしめ	せしめよ
	せむ	せむる	せむれ	せしめ	せしめ	せしめよ

崇敬
動詞

被役 動詞	せらる	せらる	せらるれ	せられ	せられ	せられよ
	させらる	させらる	させらるれ	させられ	させられ	させられよ
能動詞	しめらる	しめらる	しめらるれ	しめられ	しめられ	しめられよ
	せしめらる	せしめらる	せしめらるれ	せしめられ	せしめられ	せしめられよ
現在	ハ、モ、の結	ヅ、ヤ、の結	コソの結	未然	過去	

斷言法以下、命令法までの説明は、上にあれば、それに准じて心得べし。

(三)能動詞 是は、己が爲し得る動作を顯す辭なり。例へば、「一日に十里の道を行かる」秋毫の末だに見らる「七尺の屏風も飛びて踰はらる」などの如し。

此の辭ハ、前の圖に掲げし如く、「らる」「せらる」の三助働詞を、動詞または名詞に連ねて、其の性を顯すべき也。但し、「る」を動詞の四段活用言、れよび奈行、良行、の二變格活用言に續け、「らる」を其の餘の各種に續け、「せらる」を名詞、れよび副詞に續くる法なり。而して動詞は、すべて第四階の辭に續

くる事、左の表の如し。

四段活用	書か	る	る	る	る
奈行變格	往な	る	る	る	る
良行變格	居ら	る	る	る	る
上二段活用	起き	る	る	る	る
下二段活用	集め	る	る	る	る
上一段活用	見	らる	らる	らる	らる
下一段活用	蹴	らる	らる	らる	らる
加行變格	來	らる	らる	らる	らる
左行變格	爲	らる	らる	らる	らる
名詞	製造	せらる	せらる	せらる	せらる
副詞	明に	せらる	せらる	せらる	せらる

右の表には、第三階の語尾までを掲げて、其の以下を略せり。然れども、第

六階までの法をもてる事、前の圖に就きて悟るべし。而して熟語法の例は、書かれ侍り起きられ候ふの類の如く、重言法の例は、大字も書かれ細字も寫さるの類の如し。又此の辭に限りて、命令法なし。

(四)受動詞 是は、他より受くる動作を顯す辭なり。例へば、犬に噛まる友に進めらる師に教授せらるの如し。或はまた己が心より、己れに動作を受くる意を顯す事あり。例へば、昔志のをる行末思ひやらるなどの如し。

此の辭は「る」「らる」「せらる」の三助働詞を、動詞、またハ名詞、れよび副詞に續くる事、總べて能動詞に同じ。唯、此の辭は、命令法をも具へもてるのみ、能働詞に異なり、重複に似たれど、語例の一二を示さん。

四段活用言	推さ	る	る	る	る
上二毀活用	恨み	らる	らる	らる	らる
下二段活用	育て	らる	らる	らる	らる

上一段活用…射

下一段活用…蹴

名詞…
罪 保護
せらるる せらるる せらるれ

副詞…
重く

(五)役動詞 是ハ、人を役して爲さしむる動作を顯す辭なり。例へば「讀ます」「掃かしむ」「集めさす」「勉強せしむ」の如し

此の辭は「す」「さす」「せさす」「しむ」「せしむ」の五助働詞を、動詞、又は名詞に續くるなり。但し「す」を四段活用言、れよび奈、良、二行の變格に連ね、「さす」を其餘の各種に連ね、「しむ」「せしむ」を四段以下各種の活用言に連ね、「せさす」と「せしむ」とを、名詞、副詞に連ぬる法なり。然して動詞には、總べて第四階の辭に連ぬる事、左表の如し。

四段活用言…書か
奈行變格…往なす する すれ

良行變格…居ら

上二段活用…起き

下二段活用…教へさす さする さすれ

一段活用…
炎 書取 暗記

名詞…
せさす せさする せさすれ
せしむ せしむる せしむれ

副詞…
詳に

四段活用言…掃か

上一段活用…耻ぢ

下一段活用…勤め 志むる 志むれ

一段活用…見

加行變格…來

(六)被役動詞 是ハ、他人に役せられて、爲す動作を顯す辭なり。例へば、「掃かせらる」「下りさせらる」「告げおめらる」「隨行せしめらる」などの如し。

此の辭ハ「せらる」を「せらる」^まめらる「せしめらる」の四助働詞を、動詞、またハ名詞、れよび副詞に連ぬ。但し「せらる」を四段活用言、れよび奈行、良行、の二變格よ連ぬ、^ませらるを其の他の各種に「まめらる」をあらゆる動詞に、又「せしめらる」を名詞、副詞に連ぬる法なり。而して動詞には第四階の辭に連ぬる事、前に同じ。

四段活用言……讀ま	せらる	せらるる	せらるれ
上二段活用……下り			
下二段活用……植ゑ	ませらる	ませらるる	ませらるれ
上二段活用……射			
加行變格……來			
四段活用……讀ま			
上二段活用……下り			
下二段活用……傳へ	まめらる	まめらるる	まめらるれ

上一段活用……着			
良行變格……居ら			
名詞……遠乗 <small>まはり</small>	まめらる	まめらるる	まめらるれ
副詞……出張			
副詞……靜に			

以上助働詞のうち「せらる」「せさす」「せしむ」「まど」の「せ」は、元來左行變格活用の動詞なれど、他の助働詞と合體して、一種の助働詞に轉成せしものど、心得て可なり。

(七)崇敬動詞 是は、他の動作状態を崇敬して云ふ辭なり。これに、獨立の語と、動詞の熟語と、助働詞を借るものとの區別あり。獨立の動詞にて、敬意を顯す辭は「います」「まします」「いますそがり」^まはしますなどの如し。

動詞の熟語にて、敬意を顯す辭は「書き給ふ」「讀み給ふ」「杯の如し」。

助働詞を借りて敬意を顯す辭ハ「覺さる」「仰せらる」などの如し。此の類は受働詞以下、被役動詞までの言狀と、全く異ならず。

席に著かる 覺さる 仰せらる 御覺せらる

右は、受働詞の言狀に同じ。

參らせ給ふ 起させ給ふ 御覽せさせ給ふ

御位に即り止め給ふ 民を撫恤せしめ給ふ

右は、役動詞にれなむ。

東宮に居させらる 假りの世を棄てさせらる

東國へ成ら止めらる 初瀬へ參籠せしめらる

右は、被役動詞にれなむ。

是れらの例にて、崇敬動詞の趣を知るべし。そも、敬語の、受働以下の辭と同じき故は、先輩も既に云へる如く、貴人の何事にまれ、自身みづかみする事なく、ればかたは從者にせられ、又は人してせまむるに因り、遂にそれが

一種の敬語となりたる也けり。以上は、總べて他の状態、動作を敬ふ辭なるが、又別に已が動作などを、貴人に對しては、敬ひ云ふ辭あり。例へば「奉る」「候ふ」などの如し。而して是も、又他の動詞に連りて、熟語となる事あり。見奉る「參り候ふ」「承り侍り」などの如し。

第三 動詞の時

動詞は、言狀いひさまによりて、動作の現在なると、既往、および將來なるとを顯す事あり。之を時と名づく。是れに左の三種あり。

- 一、現在
- 二、過去
- 三、未來

(一)現在 是は、現時に在る動作を顯す辭にて、動詞の第一階斷言法の辭、すなはち是れなり。例へば「書を読む」「文を學ぶ」などの如し。然れども上の辭に「ぞ」「や」の類、また「こそ」といふ助辭の添へる時は、二階の辭、或は三階の辭がこれに代りて現在の斷言法となる。例へば「書をぞ読む」「文をこそ

學べ「などの如し。

(二)過去 是は、既に過ぎ去りたる動作をいふ辭にて、小過去、中過去、大過去の別あり。是れらは、助働詞を添へて、其の意を顯す法なるが、其の助働詞にも、語尾の變化あり、それ「くの法ある事、總べて動詞に異ならず。左の圖を見よ。

			第一階	第二階	第三階	第四階	第五階	第六階
			斷言法	連名法	既然法	將然法	重言法	命令法
中過去	小過去		り せり たり ぬ つ	る せる たる ぬる つる	れ せれ たれ ぬれ つれ	ら せら たら な て	り せり たり に て	〇 〇 〇 ね てよ
しき き けり						せ せし (けら)	〇 〇 けり	〇 〇 〇

	大過去	
	に けり たり	に けり たり
	て けり き	て けり き
	たり けり き	たり けり き
ハ、モ、の結	に けり たり	に けり たり
ヅ、ヤ、の結	に ける たる	に ける たる
コッの結	に けれ たれ	に けれ たれ
	〇 〇 〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇 〇 〇
	〇 〇 〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇 〇 〇
	〇 〇 〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇 〇 〇

第一階以下の諸法ハ、凡べて上のに准へ知るべし。但し第五階なる辭には、熟語法とならず、重言法ともならず、ぬがあれど、他の助働詞などに連るハ、ここの格なれば掲げれけり。又第四階以下、〇の標しきを掲げて空位に志たる所ハ、そこに活用する辭のなき事と心得べし。

小過去との今爲しをはりたる動作を云ふ辭にて、現在に近きものなり。此の助働詞ハ、圖にも掲げし如く、「り」「せり」「たり」「ぬ」「つ」の五つあり。

此の助働詞ハ、四段活用の動詞に限りて續く辭なり。例へば「咲けり」

推せり「立てり」などの如し。表を以て示さん。

咲け 推せ 立て 飛べ 住め 釣れ

り
る
れ
ら
り

(此の表は、四段活用言の第三階に、「リ」「ル」「ラ」「リ」といふ助働詞の連りたる様ふ見ゆれど、然らず。實は第五階の「咲キ」といふ辭に、「テ」「アリ」といふ辭の連りて、約りも、省りもしたるものぞ。されど、今心得やすきたため、かく記したるなり。)

此の助働詞ハ、四段活用言ならでは、續かざる法なるを、世間往々、下二段活用言にも續けて、「受けり」「竟へり」「見えり」の如く云ふ事あり。誤なり。

せり 此れは「爲而有」の意なりと云ふ。名詞に續きて、「霞せり」「罪せり」「運動せり」の如く云ひ、副詞に續きて、「詳にせり」「高くせり」「甚しくせり」の如く云ふ。されど決して動詞に續く事なし。

たり 此れハ「而有」の約なりといふ。諸動詞の第五階に續きて、「咲きたり」

落ちたり「覺えたり」「見たり」「來たり」の如く云ふ。咲きてあり「覺えてあり」などの意なり。

ぬ 此れハ、奈行變格活用言より、轉成せし助働詞なり。諸動詞の第五階に連りて、「行きぬ」「朽ちぬる」「成りぬれ」などの如く云へども、奈行變格のみには續かず。

つ 此れも、諸動詞の第五階に連りて、「推しつ」「捨てつ」「延べつ」の如く云ふ。以右の「ぬ」と「つ」とは、同じく過去の辭なれども、其の中にて、自動と他動との差別あるが如し。古歌の辭に徴するに、

鏡山いざ立ちよりて見てゆかん。年經ぬる身は老いやとぬると、
取りとむる物にしあらねば年月を、あはれあなりと過しつるかな。
曉の霧も晴れぬ。 恨をぞ晴らしつる。

かゝれば「ぬ」は自動にして「つ」は他動なる事、能く知られたれど、初心の人のために、易く示さん。左の表を見よ。

水	花	夜	日	人
が				
流れぬ	散りぬ	明けぬ	暮れぬ	止りぬ
自動詞				

水	花	夜	日	人
を				
流しつ	散しつ	明しつ	暮しつ	止めつ
他動詞				

然れど此の區別古くより亂れぬと見ゆ。

中過去とは、小過去より、やく遠き動作を顯す辭なり。これには「けりき」し「き」の三助働詞あり。



けり 此は「來而有」の約とも、「來經有」なりとも云ふ。諸動詞の第五階に續きて「飛びけり」「落ちける」「見えけれ」の如くいふ。而して「けら」と活用する事、極めて希なり。唯、万葉集に載せたる歌の中に「けらずや」と云へる辭、四五ヶ所あるのみ。古格あれば、圖には括弧の中に記しおけり。此の助働詞へ、また過去の意のみならず、唯、語意を強めて、其の事を定め

ふにも用ふ。其證左の如し。

年の内に春は來にけり。一歳をこそとや云をん。今年とやいとん。茅蚬の鳴きつるなべに、日は暮れねと、思ふは山の影にぞ有ける。山里ハ冬ぞさむしさまさりける。人めも草もかれぬとおもへば、の如し又事物を説明する如き意にも用ふ。但し、たかかた「なりけり」と續く時は限れり。

吹く風の色の千種に見えつるは、秋の水の葉の散ればなりけり。山川に風のかけたるしがらみは、流れもあへぬ紅葉なりけり。

かゝる例、歌のみならず、文にも猶多かり。これは「けり」と同じ意の辭なれど、古文に就きて按ずるに、聊の差別ありしが如し。まづ「けり」ハ過ぎ去りし動作の、今まで續きて存せるに云ひ「き」ハ其の動作の、今に存せざるに云へりと見ゆ。然れど、是れも早くより、其の別亂れて、同じ様に用ひられたり。

此の助働詞も諸動詞の第五階に連る法なれど、唯、加行左行の二變格活用言には、異例あり。加行變格言に限りて「ししか」の二つへ、第四階よも第五階にも連れど、「き」の一辭のみは、いづれにも續く事なし。又左行變格言に至りて「し」か「の」二つは、第四階に連り「き」の一辭のみ、第五階に連る。小圖を以て示さん。

加行變格活用言		第四階		第五階	
こ	し	か	き	し	か
し	し	か	し	し	か
左行變格活用言	せ	し	し	し	か
		か		し	し
				か	し

此の助働詞の斷言法は「き」といふ辭にして、通例は「花ハ咲き」朝起き「受け見」在り「き」と云ふべきを、往々「花ハ咲き」早く起き「の」如く用ひ誤る。
（此の「き」は「き」の誤り）

又第二階(連名法)は「し」といふ詞にして、諸動詞の第五階に連る法なれば、四段活用言の如きへ「記」と「文」申し「旨爲」と「業」の如く云ひ、下二段、お

よび左行變格には「瘠せし身御坐せし位」の如く云ふべきを、往々混亂して「記せし文御坐しし所」など續くるがあり。左に小圖を以て、其の區別を明さむ。

四段活用言		將第四階		第五階	
推	推	推	推	推	推
し	し	し	し	し	し
か	か	か	か	か	か
下二段活用言	失	失	失	失	失
	せ	せ	せ	せ	せ
	し	し	し	し	し
	か	か	か	か	か
變格活用言	せ	し	し	し	か
		か		し	し
				か	し

又第四階の助働詞「せば」の辭を文章中に用ひんには、其の句の末を結ぶに「まし」の辭を以てするを、古來の通則とす。其の例ハ、

世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心ハのどけからまし。

紅葉の流れざりせば、立田川、水の秋をば誰れかまらまし。

の如し。稀よは他の辭にて、結べるもあるハ、特例と謂ふべし。

(此の「せば」を、左行變格の活用言なりと思ふも、あらめど、是れは「ナバ」「テバ」「マセバ」など、同じ類の助働詞なり。)

しき これは元來「す」(爲)と云ふ動詞に、過去の「き」「し」「か」が連りて、一種の

助働動となまる也。故に動詞には續かず。

此の助働詞の斷言法は「しき」といふ辭なるに、世間第二階の辭を斷言法として誤用せり。例へば「何某は近頃修身書を著述せし」「何新聞ハ昨日初

號を發兌せし」の如し。正しくハ「著述しき」「發刊しき」と云ふべきなり。此の

事耳馴れずとて、不審を懷くもあらむ。仍りて特に例證を掲ぐ。

ある時ハ、風につけて、知らぬ國に吹き寄せられて、鬼の様なるもの出來て、殺さむとしき。ある時ハ、來し方行末も知らず、海にまされん

としき。(竹取物語)

なでふ女が、眞字文を讀む。昔ハ經をよむだに制しき。(紫式部日記)

生年十八歳、髮を切りて遁世しき。(源平盛衰記)

以上述べ來し過去の助働詞ハ、頗る繁雜なれば、更に一覽表を掲げて、心得易からせめんとす。

四段活用言	……	咲け	り
名詞	……	罪	せり
副詞	……	詳に	
四段活用言	……	推し	
上二段活用	……	起き	
下二段活用	……	受け	
上一段活用	……	見	
下一段活用	……	蹴	
加行變格	……	來	
左行變格	……	爲	
奈行變格	……	往に	
良行變格	……	在り	
名詞	……	運動	

り	せり	たり	ぬ	つ	けり	き
中過去	小過去					

大過去とは、中過去より、一層遠く隔りたるを云ふ。此の助働詞に「に」に「たりにけり」にきてけりてきたりけりたりきの七つあれど、いづれも小過去の辭と、中過去のと打重りて、大に遠きを顯す辭となりしものなれば説明に及ばず。小過去中過去の條に准じて心得べし。

(三)未來 是れハ、今よりせんとする動作を顯すに用ふる辭なり。然せんハ、例の助働詞を添ふべき法なり。圖を掲げん。

	第一階	第二階	第三階	第四階	第五階	第六階
	斷言法	連名法	既然法	將然法		
未來	む	む	め	○	○	○
まし	まし	まし	ましか	ませ	○	○
ハ、モ、の結		ヅ、ヤ、の結	コソの結			

未來の助働詞ハ「む」まし」の二つあるのみなり。

これは諸動詞の第四階將然法の辭に續く法なり。行かむ起きむ集む

めむなどの如し。時としては、又「て」ななどいふ助辭とも連合して「行きなむ起きてむ」の如く云ふ例もあり。

まし これも前の「む」と用法おなじ。行かまし起きまし」の如し。而してこも又「てましなまし」と連合して云ふ例あり。又既然法の「ましかば」と將然法の「ませば」といふ辭とが、上にある時ハ、いづれも其句の末を「まし」といふ辭にて結ぶ事、古來の定則なり。

大納言起出でくの給そく。(中略)まして龍を捕へたらましかば、また事もなく、我れハ害せられなまし。(竹取物語)

此の公たちのれをせざらましかば、こよひの眠りさましハなからまし。など聞えれもひて、云々(榮花、はな山)

磐長姫恨み怒りて、我れをも召さましかば、世の人の命長くて、磐石の如くあらまし。(正統記)

右は、既然法の辭に應ずる「まし」の例なり。

飛鳥川柵わたしせかませば流るゝ水ものどにかあらまし（万葉集三）
夢路よも宿かす人のあらませば寐覺よ露ハ拂をざらまし（後撰十二）

右ハ、將然法の辭に應ずる「まし」の例なり

第二章 形容詞

形容詞ハ、名詞また代名詞の前、或は後に附きて、其の形狀、品質、情意等を顯す辭なり。例へば「山高し」「水長し」「高き岡」「廣き野」の如き、また「心善し」「意地悪し」の如き、又「見るハ嬉し」「聞くハ憂し」などの如し。而して形容詞も、元來活用する辭にして二類あり。音雜活用言の單複二類をなはち是れなり。

第一 形容詞の法

形容詞ハ、すへで語尾の變するに就きて、それハ、の法具ハれり。其の法、れほか九動詞に似て、聊異なる所あり。まづ其の名稱を掲げん。

- 一、斷言法
- 二、連名法
- 三、既然法
- 四、將然法
- 五、重言法
- 六、副詞法
- 七、名詞法

さて形容詞語尾の變化と、法の次第とを示さん。

	第一階	第二階	第三階	第四階	第五階	第六階
單活用	善し	よき	よけれ	よく	よく	よ
複活用	悪し	あしき	あしけれ	あしく	あしく	あし
	ハ、モの結	ヅ、ヤの結	コソの結			
	斷言法	連名法	既然法	將然法	重言法 副詞法	熟詞法 名詞法

第一階、斷言法、是ハ、舊來截斷言と稱せし辭なるガ、語句の切れ目となりて、一段の末を結ふ事、動詞にれなむ。例へば左の如し。

水清し 山高し 水茂し 蔭涼し
花は赤し 葉は青し 色も美し 香も馨し

通例の語句よハ、第一階の辭を以て、其の段末を結ぶべき法なれど、若シ文中上の辭に「ぞ」「や」の類ひある時は、第二階の辭を以てし、又「こそ」といふ助辭の添へる時は、第三階の辭を以て、其の段末を結ふ事、これは九動詞の

法に同じ。左の如し。

水ぞ清き

山ぞ高き

蔭ぞ涼しき

花こそ赤けれ

葉こそ青けれ

香こそ馨しけれ

形容詞の斷言法は、語尾を省略して云ふ事あり、例へば、

あなれもしろ

あなう世の中

あなかしこや

などの如し。

第二階連名法、

是は名詞および代名詞の上より連りて、下なる事物を

形容する法なり。

圓き山

細き谷

善き人

惡しき心

又時としては、下なる名詞、および代名詞を略する事あり。

赤き[㊦]黒き[㊦]種々なり。

高き[㊦]卑しき[㊦]推なべて

長き[㊦]を採りて短き[㊦]を補ふ

などの類なり

第三階、既然法、

此の二つは別に説くべき事なし、動詞に准じて心得

第四階、將然法、

べし。但し動詞と、聊異なる點は、形容詞の將然法は、未

來の助働詞に續く事なきなり。

第五階、重言法、

是も、動詞に准じて心得べし。但し動詞と、聊異なる點

は、過去の助働詞に續かざる事、是れなり。扱重言法の用例は、

山青く水白し

足元遠く雲近し

恐ろしくも又物凄し

唇赤く色白く身體大く筋骨たくまし

などの類を見て知りぬ。

副詞法、

是は、重言法の辭と語尾同態にして、言ひ様により、副詞とな

るなり。其の例は、

遠く望む

高く昇る

深く沈む

空しく歸る

久しく止る

嬉しく思ふ

などの如し。

第六階熟語法、是は名詞、れよひ動詞形容詞などゝ連合して、一の熟語となる辭なり。まづ名詞と連合する例ハ

長歌 高山 廣場 細川
現し身 嬉し涙 同心事 惡し様

動詞形容詞と連合する例ハ、
遠避る 近寄る 薄ぐらし 細なほし

などの類なり。
名詞法、是は名詞の如く用ふる辭なり。例へば、

面白の花の盛 耻かしの森 ぐちをしの花の契りや
などの如し

第二 形容詞の意趣

形容詞も、其の意趣を區別すれば、時節、地位、情意等を顯し、聲容、形體等を寫せるものあり。左の類なり。

時刻	早し	遅し	久し
地位	遠し	近し	遠々し 遙けし
情意	樂し	嬉し	憂し 悔し
品質	善し	惡し	強し 弱し
感觸	暑し	寒し	痛し 馨し
色容	赤し	青し	美しく きら／＼し
度量	多し	厚し	重し 深し
狀體	圓し	細し	平たし

此の外、なほ多かれども略す。

第三 形容詞の別類

形容詞ハ前に掲げし音雜格活用言の二類を以て、本體とすべきに、又別に、形容動作を顯す、一種の辭あり。是ハ、名詞、れよひ形容詞に限り附續する、短き辭にして、其の語尾の變化ハ、動詞の活用と、同心きものなり。さる

ハ打任せて動詞とも云ひ難ければ、志をらく、形容詞の別類と名つけて、爰についでつ。扱その短き辭とハ「めくやく」だつ「ばむ」が「ぶ」の類なり。めく「上手めく巧者めく」さくめく「そよめく冬めく時雨めく」の如し。加行四段活用言に同じきなり。

やく「若やく花やく」さくやく「の如し。これも。加行四段活用言に同じ。

だつ「艶どつ荒どつ」切掛どつ物の如し。多行四段活用言にれなむ。

ぼむ「情をむよしをむ」氣色をむの如し。麻行四段活用言に同じ。

がる「才がる親がる」哀がる「苦しがる欲しがる」の如し。良行四段活用言に同じ。

ぶ「鄙ぶ嬾ぶ」大人ぶ殊更ぶの如し。波行上二段活用言にれなむ。

此の外に「翁さび」「少女さび」の如き「さび」といふ辭の類、其の他にも多からめど、餘りに古言なるハ省けり。

第三章 助働詞

助働詞は、名詞、動詞、等を助けて、其の言意を種々に云顯す辭なり。例へば「人なり鳥あり書くべし」讀むめり「暑きなり寒きなり」などの如し。

助働詞ハ、語尾活用の狀より云へば、助詞の如きあり、形容詞の如きあり、又活用なき辭も、聊ありて、まづハ、三類に分る。

語尾の活用する助働詞は、其の動詞に似たると、形容詞に似たるとを問はず、其の變化に隨ひて、それハ、の法をもてり。今一括して左の圖を成す。

指 定	第一階	斷言法	なり たり かり べし
	第二階	連名法	なる たる かる べき
	第三階	既然法	なれ たれ かれ べけれ
	第四階	將然法	なら たら から べく
	第五階	重言法	なり たり かり べく
	第六階	命令法	なれ たれ かれ

	希望	對比	否定	推量
ハ、モ、の結	たし、や、が、ね、なむ	ごとし	まじ、じ、〇、ず	めり、らむ、らし、けむ、けらし、ぬらむ、つらむ
ヅ、ヤ、の結	たき	ごとき	ぬ、ざる、じ、まじき	める、らむ、らし、けむ、けらし、ぬらむ、つらむ
コソ、の結	たけれ	〇	ね、ざれ、〇、まじけれ	めれ、らめ、らし、けめ、けらし、ぬらめ、つらめ
	たく	ごたく	ず、ざら、〇、まじく	〇〇〇〇〇〇〇
	たく	ごたく	ず、ざり、〇、まじく	〇〇〇〇〇〇〇めり
	〇	〇	ざれ、〇、〇	〇〇〇〇〇〇〇〇

第一階以下、六階までの法の事は、總べて、動詞形容詞に准へ知るべし。但し第五階なる辭のうちには、重言法とならぬもあれど、過去の助働詞などに連るは、こゝの格なれば、掲げられけり。

第一 助働詞の意趣

助働詞を、其の意趣より區分すれば、前表の上より標せし如く、指定、推量、否定、對比、希望の五つあり。

(一)指定 是ハ、事物をそれと指定し、又解釋する如き、意を顯す助働詞にして、「なりたりかりべし」の四つあり。

なり 此の助働詞ハ、名詞に續きて「人なり、獸なり」の如く云ひ、副詞に續きて「静なり」詳なりの如く云ひ、動詞に續きて「書くなり、讀むなり」教ふるなりの如く云ひ、形容詞に續きて「善きなり、久しきなり」の如く云ふ。

此の助働詞ハ、動詞形容詞またハ他の助働詞に連るよハ、必第二階の辭に續く法よて「習ふなり」授くるなり「勤むるなり」見るなり「爲るなり」遠き

Note

なり久しきなり」の如く云ふべきなれど、動詞よかざり、時として第一階よも續く事あり。其例ハ左に、

秋の野に人まつ虫の聲すなり。我れかどゆきていざ訪らむ。

人ハ皆花の衣よなりぬなり。苔の袂よかそだきよせよ。

男のすなる日記といふものを、女も志てみんとてするなり。

かくれど第一階に續く「なり」ハ其意極めて軽くして、唯虫の聲す又「男のそる日記」など云ふん程と心得べし。第二階よ續く「なり」こそ指定解説の意ハ強けれ。或學者ハ第一階よ續ける「なり」を詠歎なりと云へれど、いかゞあらむ。

たり 此れハ名詞代名詞よのみ連り、其の外の辭よハ續かず。例へば「君、君たり」汝ハ、汝たり」の如し。又外來語よも續きて「寂莫たり」卓然たり」など云ふ例あり。扱動詞よ續く「たり」ハ過去の助働詞なれば、混ざるなれ。かり 此れハ形容詞の第六階よ限りて續く辭なり。例へば「道遠かり」山

高かり」の如し。かく云ふ辭ハ、元來形容詞の第五階(副詞法)よ「あり」といふ動詞の連合して「くあり」となり、更よ約りて「かり」となりしものなれど、其の性質ハ指定なれば、會得し易からんため、特よ一種の助働詞と定めて、爰に掲げつ。

べし 此れも指定の助働詞なれど、其の意聊輕きよ似たり。例へば「後刻行くべし」敵來らハ戦ふべし」の如し。

此の外にも種々の意よ用ふる事あり。まづ推量よハ「山を踰えハ川あるべし」の如き、許容よハ「汝歸を願を歸るべし」の如き、能動よ似たるハ「民ハ之よ據らしむべし」の如き、命令よハ「勉強すべし」などの如し。

此の助働詞ハ、良行變格よ限りて、第二階よ續き、その外の諸動詞よハ、第一階の辭よ連る法なり。

書くべし 起くべし 付くべし 捨つべからず

かくあるべきを世間多くハ第四階よ續けて、

過ぎべし 起きべし 付けべし 捨てべからず
と云へり。誤なり。但し、上一段活用言は續けて「見べし」著べしなど云へる
ハ「見るべし」著るべしの略音なり。

(二)推量 是れよハ、現在の事物は就きて推量る辭と、過去の事物を推
量るとの別あり。現在のハ「めりらん」らしの三つなり。

めり 此ハ「見エアリ」の約と云ふ。事物の状態を推量り云ふ辭なり。動詞
の第一階は續きて「書くめり」落つめり「流るめり」の如く云ふなり。但し、良
行變格活用言に限りて、第二階は續く事、前の「べし」に同じ。

らむ これも、動詞連續の法「めり」に同じ。

らし これハ、輕く推量る意の辭なり。動詞連續の法「らむ」に同じ。さよ中
と夜ハ「ふけぬらし」の如し。此の辭ハ斷言法の一體あるのみよて、語尾の
變化なく、連名法、既然法ともなる事なけれど「ぞ」「や」「こそ」等の句を結ぶ事
あるが故よ、圖よハ三階とも掲げおきつ。

Notice

過去の事を推量る助働詞よハ「けむ」「けらし」「ぬらむ」「つらむ」の四つあり。

けむ これハ動詞の第五階は連る法なり。昨日行きけむ「古もかくあり
けむ」の如し。

けらし これハ過去の「け」といふ辭よ、前の「らし」が連合して、一種の助働
詞となりたるなり。故にこれも斷言法の一體のみよて、その以下の活用
なし。

ぬらむ これも過去の「ぬ」よ、前の「らむ」の連合して、更よ過去を推量る助
働詞となりたるなり。

つらむ これも過去の「つ」と「らむ」との連合せるなり。

(三)否定 是ハ動作を爲すと打消す辭よて「書く」「讀む」などいふ動作よ
反對して「書かず」「讀まず」と打消す意を顯すものなり。これよ「ず」「ざる」「じ」の
三つあり。

ず 此ハ左行音と奈行音とよ涉りて、活用す。而して第五階の辭ハ、名

詞に連合して「問えず語知らず顔」などいふを、他は例なき事なり。又、此の辭ハ、副詞の如くなる事あり。絶えず思ふ飽かず見るなどの如し。

ざる。これハ、上の「ず」に、動詞の「あり」の連合して、更に一種の助働詞となるなり。されハ動詞連續の法ハ、前の「ず」に同じ。然れども此の辭ハ、斷言法となる辭なし。故に圖にハ空位にせり。但し、過去の助働詞は續きて「行かざりき問をざりけり」などいふハ第五階の辭なり。

まじ。これハ、未來の「まし」といふ助働詞の反對にて、せんとする事を心に打消して「せざらんとする意なり。動詞の第一階に連續して「書くまじ」讀むまじ」などいふなり。但し、長行變格に限り、例の第二階は續きて「あるまじ」の如く云ふ定なり。

じ。これハ「不」のいまだ然らぬを豫ねていふ意の辭なり。動詞の第四階は續けて「行かじ語らじ在らじ」などいふ法なり。此の辭ハ、斷言法の一體のみよて、その他の活用なし。然れども「負けじ魂あらじもの」などいへば、

連名法となる時もありと見ゆ。仍りて圖ハ第二階も掲げられけり。

(四) 對比 是ハ、物を相對せしめて、比ぶる意の辭にして、唯「如し」といふ一辭あり。

おとし。これハ、形容詞の活用は似て、聊異なる所あり。第三階の活用なき事是れなり。此の辭ハ、動詞の第二階は續きて「落梅雪のふる如し」と云ひ、又「が」といふ助辭は續きて「山の如し掌を指すが如し」などいへるぞ、他の助働詞に異なる所なる。

(五) 希望 是ハ、動作の然あれかしと、心に願ふ意を顯す辭なるが、必、已れよ求むる意と、又他人よ向ひて誂ふる意との差別あり。已れよ求むるにハ「たしばや」が「な」の三つあり。他に誂ふるハ「ねなむ」の二つあり。

たし。これハ、形容詞の活用とやく同じ。動詞の第五階は續きて「行きたし祭見たし在りたき事ハ誠しき文の道」などの如し。

ばや。これハ、一體のみよて、語尾の變化なけれど、猶よく語句の段切れ

を結ぶ辭なる故に第一階の所に掲げつ。以下の辭も此の例に准ぜよ。扱此の辭ハ、動詞の第四階に續きて「聞かむや見せむや」などいふ法なり。若し誤ちて第三階に續くる時ハ、疑念の辭となるなり。心すべし。

がな これハ、助辭の「も又し」など連る法にして、他は異なり。仍りて特は其例を掲げて示さむ。

モガナ いぶせくも心よ物を思ふかな。やよや何如と問ふ人もがな。

シガナ 秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがな。折柄聲の身にへまむかど、

ニシガナ 都出でくけふ九日よ成よけり。とをかの國よ到りよしがな。

ナシガナ 久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな。

又「な」を略して「が」ばかり唱ふる例もあり。

モガ 我宿の尾花が上の白露を消たずて玉よぬくものよもが。

シガ 甲斐が根をさやにも見しが。けくれなく横ほり伏せるさや

の中山

ニシガ 心うし深き山よも入りよしが。長閑は居りて憂世すぐさむ。

テシガ 思ふどち春の山べよ打むれてそこ共いとぬ旅寐してしが。

是れらハ、今の普通文への用ふる事まれなり。

ね これハ、諸動詞の第五階に連續して「書きね」「知りね」「起きね」などの如

く、もそら、他は詠ふる辭なり。而して斷言法の一體の外、活用する辭なし。

なむ こも、動詞および助動詞とも、第四階に續く辭なり。例へば「人も問

をなん散るといふ」とハ習をざらなんの如し。

今希望の助動詞の已れよ求むると、人よ詠ふるとを區別して、左よ掲げ

Note

たやし
をやし
がな
已れよ求む

ね
なむ
他に詠ふ

此の外に「こそ」といふ辭も、希望の意を顯せども、古歌古文の上の沙汰よ

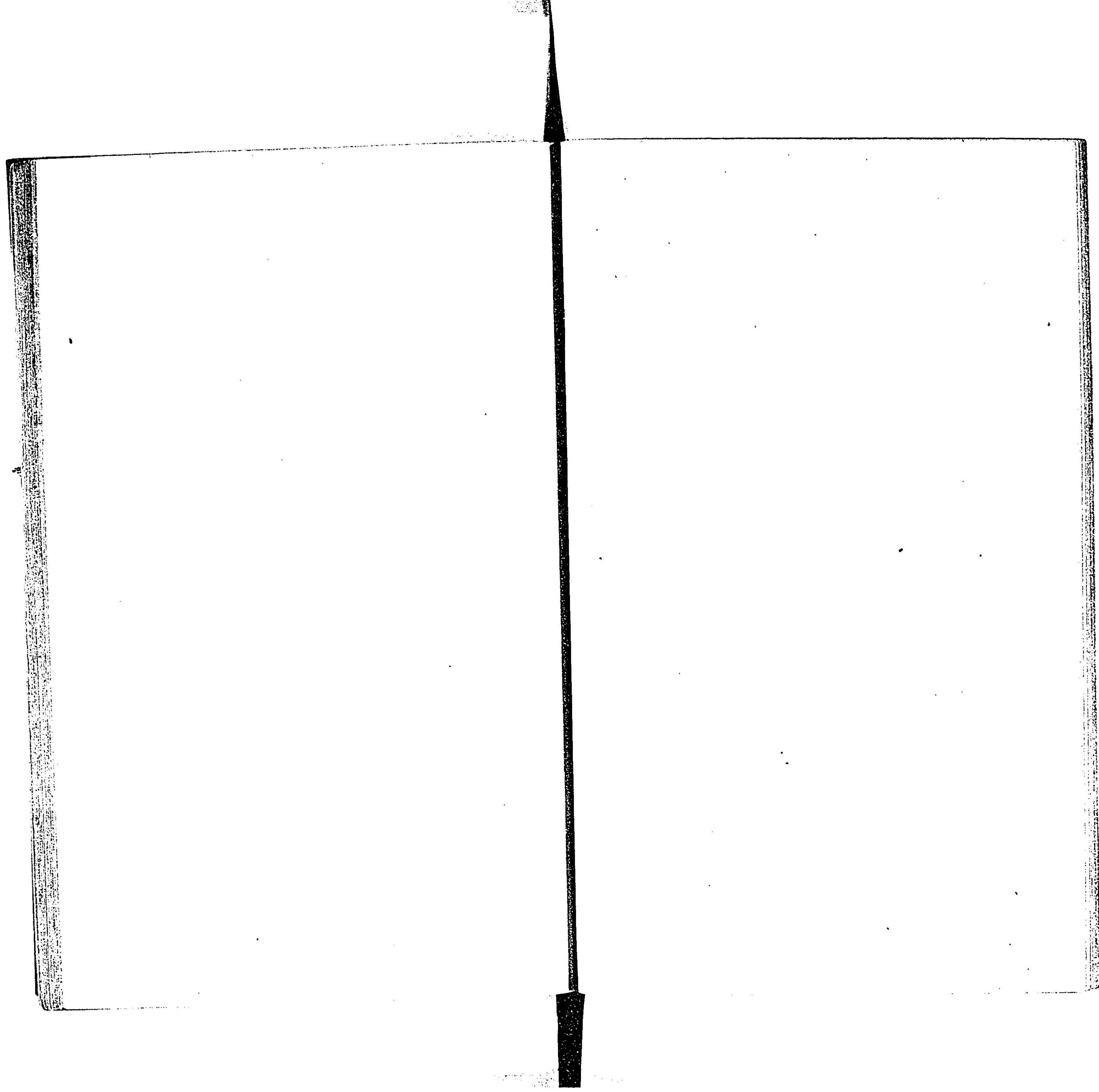
て、今ハ全く用ひず。

助働詞ハ、總べて名詞副詞形容詞動詞などに連續して、其の用をなす辭なるが、名詞副詞の如き活用なき辭ハ更なり。形容詞といへども、第二階、唯一つ「なり」といふ助働詞の附くのみなれば、紛るゝ事なし。動詞に至りてハ、第一階は續くあり、第二階に連るあり、又其の以下は續くもありて、甚、多端なれば、能くせずハ、其の法を濫り易し。そも、助働詞連續の法ハ、上に逐一述べたれども、更ハ心得易からしめむとて、左に一覽表を掲ぐ。但し、能動以下、崇敬を顯すまでの助働詞、および時の前後を顯す助働詞ハ、既ハ各條下ハ委しく掲げたれば、爰にハ省く。又第三階と第六階とハ、助働詞は連る事なれば、これを除けり。

扱又助働詞ハ、動詞副詞のみならず、他の助働詞にも連續する事多けれど、それが連續法の一覽表をも掲げむ。是れハ、助働詞と呼ぶ限りを列ねたれば、動詞のよりも更に繁雜なり。讀者其の意して見よ。

動詞と助働詞との連續表

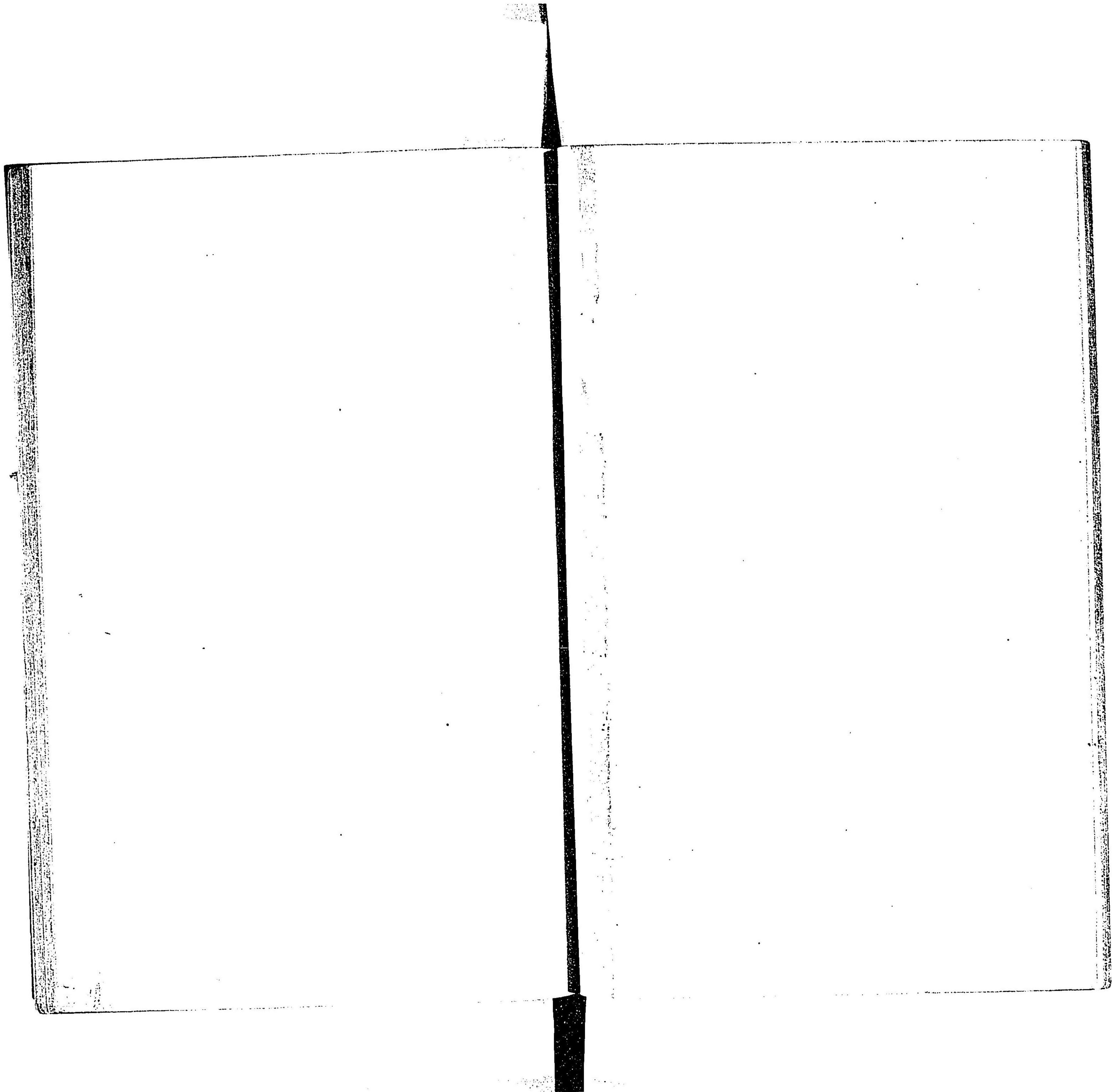
第一階		第二階		第四階		第五階	
四段	讀む	讀む	讀み	讀ま	讀み	讀み	讀み
上二段	起く	起くる	起き	起き	起き	起き	起き
下二段	教ふ	教ふる	教へ	教へ	教へ	教へ	教へ
上二段	見る	見る	見	見	見	見	見
下二段	蹴る	蹴る	蹴	蹴	蹴	蹴	蹴
加行變格	く	來る	來る	こ	こ	き	き
左行變格	す	する	せ	せ	し	し	し
奈行變格	往ぬ	往ぬる	往な	往な	往に	往に	往に
良行變格	在り	在る	在ら	在ら	在り	在り	在り
	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり
	べし	べし	べし	べし	べし	べし	べし
	めり	めり	めり	めり	めり	めり	めり
	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ
	らし	らし	らし	らし	らし	らし	らし
	まじ	まじ	まじ	まじ	まじ	まじ	まじ
	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし
	ざる	ざる	ざる	ざる	ざる	ざる	ざる
	ばや	ばや	ばや	ばや	ばや	ばや	ばや
	なむ	なむ	なむ	なむ	なむ	なむ	なむ
	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ
	たし	たし	たし	たし	たし	たし	たし
	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね



助働詞と助働詞との連続表

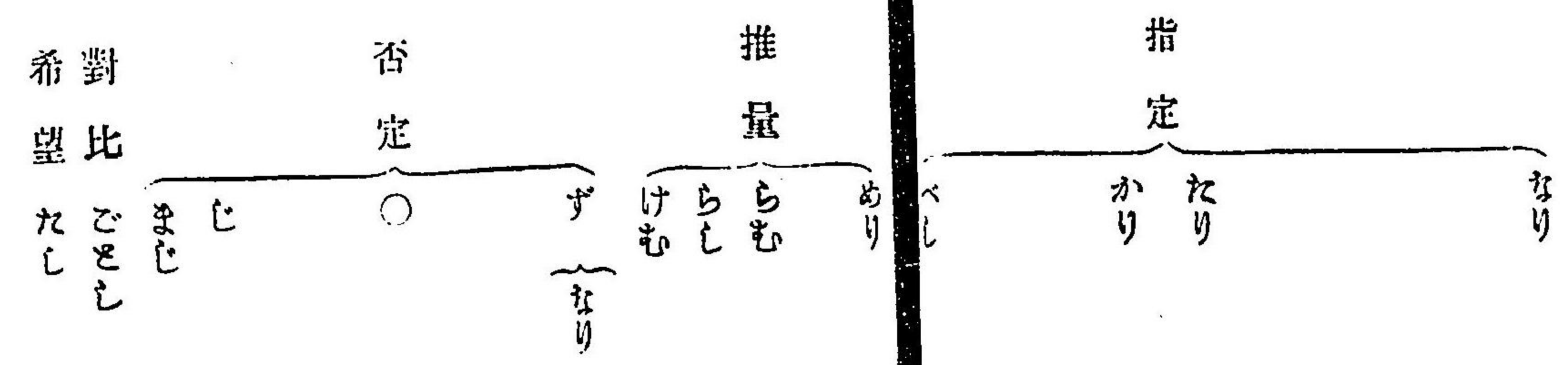
(第一)

未来	中過去	小過去	被役動	役動	受能動	階
まじ む	しき き けり	つ ぬ たり	せしめらる しめらる せらる せらる	せしむ せさす さす	せらる らる	第一階
			まじ らじ らむ めり けり なり			
まじ む せし し	ける つる なり なり	ぬる たる なり なり	せしめらる しめらる せらる せらる	せしむ せさす さす	せらる らる	第二階
			らじ らむ めり けり なり なり			
〇〇〇〇	けらす て なむ まじ む	な たら なむ なん ず まし む	せしめらる しめらる せらる せらる	せしむ せさす さす	せらる らる	第四階
			なむ なん じ ず まし む			
〇〇〇〇	けり て けり き けり	に たり けり けり けり けり	せしめらる しめらる せらる せらる	せしむ せさす さす	せらる らる	第五階
			けり き けり つ ぬ			

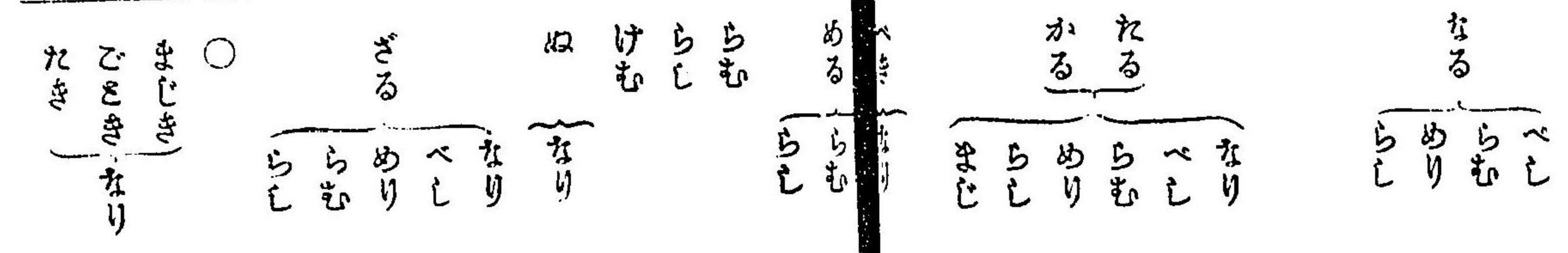


(第二)

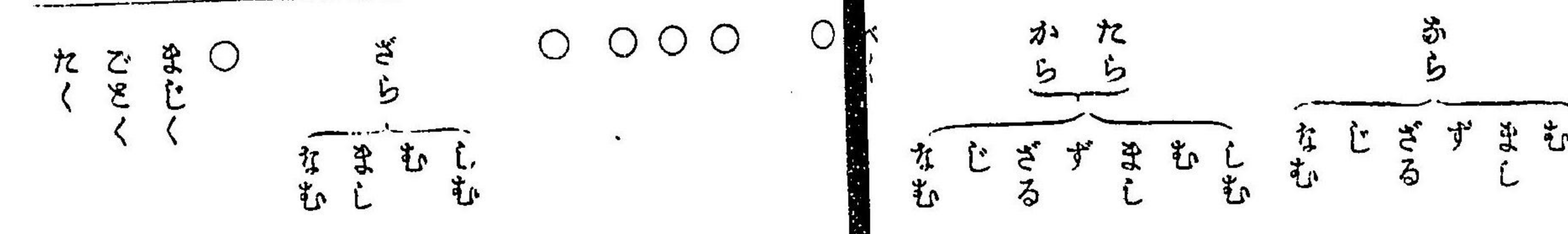
第一階



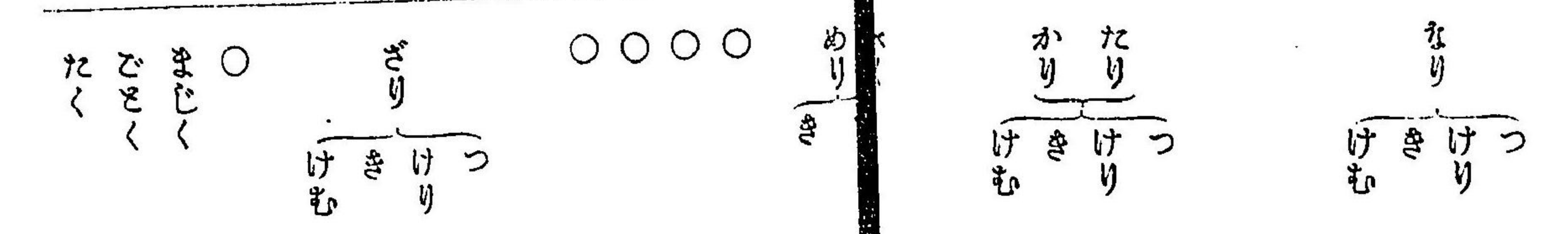
第二階



第四階



第五階

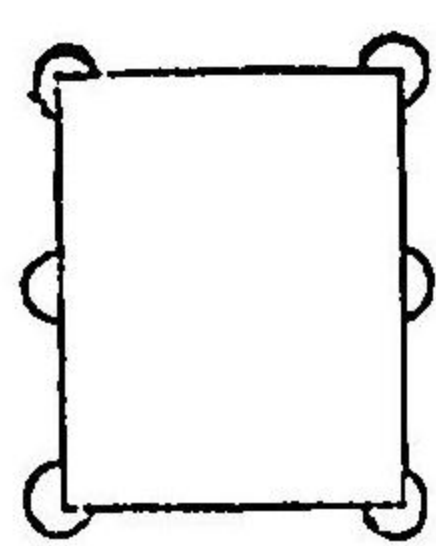


第參 天仁遠波

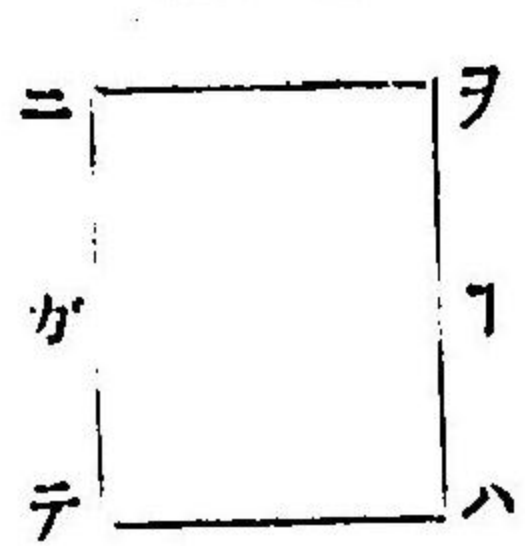
天仁遠波といふ、短き一種の辭にして、體言、用言に附續し、種々の意趣を顯し、又ハ言語の間にありて、上下の關係を明らにする辭なり。

天仁遠波ハ、又略して天仁波ともいふ。然名つけし由ハ、むかし、漢文を譯讀せん便にとて、漢字の左右よ、三つ宛の圈點を附して、第一圖の如くし、右の方の點を、「ヲ」「ハ」と訓み、左の方のを、「ニ」「ガ」「テ」と訓む事、第二圖の如くせし事ありき。之を、「ヲ」「點」と稱せしが、左の方より始めて、四隅のみを讀めば、「テ」「ニ」「ヲ」「ハ」となるより、かゝる類の辭を總稱して、然いへるなり。

圖一第



圖二第



第一章 感嘆詞

感嘆詞ハ、喜怒哀樂の情意より發する、感賞、またハ嘆息の辭なり。されど、驚怖して叫ぶ聲も、又、人を呼ぶに發する聲の類をも、去さらく感嘆詞と

名つけつ。而して、之を語法上より區分すれば、左の二大別あり。

第一 獨立格の辭

第二 附續格の辭

(一)獨立格の辭 是ハ「あな」「あはれ」「あら」「嗚呼」などの類にて、他の辭ニ附續せずとも、感嘆の意、れのづから通ずるものを云ふ。

あな

あそれ

あら

嗚呼

ばれ

いで

其頃

いざ

是の四つハ、みな、物に感動するより、發する聲なれハ、賞賛も、痛悼も、驚怖も云ふ。例ベバ、「あなかしこあなたのしあそれいと寒し」「あら無惨や」「嗚呼樂しきかな」「嗚呼悲しきかな」などの如し。近俗の辭ニ「あつばれ功名手柄よ」などいふ。「あつばれ」も、この「あそれ」を促呼音便ニ唱ふるなりけり。

「いで 御消息聞えん」「いで 誘ひ起す時に發する辭なり。いざさせ給へ」「いざ行かむ」など

の如し。

「やよ 此ハ呼びかくる時に發する辭なり。やよ起きよ」「やよ待てまばし」「やよや君」などの如し。

(二)附續格の辭 是ハ「かな」「な」の類の辭にて、獨立してハ、其の意通ぜず。必、名詞、またハ動詞形容詞助働詞などニ附續して、感動の意を顯すものなり。

「かな 此ハ名詞ニ續きて、玉よもぬける春の柳々の如く成り、動詞ニ續きて、まどぎに月のかくるゝかの如く成る辭なり。

「かな 此も、名詞ニ「夜半の月かな」と云ひ、動詞ニ「浮世の民に思ふかな」と云ひ、形容詞ニ「善きかな」「悲しきかな」の如く云ひ、助働詞ニ「けるかな」なる

「かな」の如くいふ。總べて活用言ハ、第二階の辭ニつゞくなり。な 此も、語意のきれたる所ニ續く法なり。例へば、「いくぞと問へな」「郭公聞けば悲しな花の色ハ移りよけりな」「老いよけるよな」の如し。

や 此ハ名詞、動詞、形容詞など、附きて、感動の意を顯す也。大原やをし

ほの山難波津よ、咲くや此花面白や、恨みずや御姿なりやの如し。

よ 此れは、前なる「やよ」の「よ」と同じく、呼びかくる聲なり。用例ハ「蝶よ花よ、哀れよ思ふよ、心細さよ、忘るなよ、夢かどよ、頃ろどよ」の如し。又四段活用言の命令法の辭、接けて「鳴けよ、待ち給へよ」の如く云ふ事もあり。是れらの外、苦をあらみ、心よを思へ、その八重垣を「などのを」と、我れハ行かむ、我れハさぶし、などの「る」との如きハ、共よ古格よ屬せり。

第二章 助辭

助辭トハ、元來活用せざる辭にして、體言、用言を助け、上下の語を連絡し、方向を示し、主客を分ち、關係を明よする等、種々の用をなすものなり。之を意趣の上より、れやよそに區別しして、左の八種とす。

- 一、主格
- 二、賓格
- 三、不定格
- 四、接續格
- 五、副詞格
- 六、禁止格
- 七、疑問格
- 八、反動格

右ハ、唯れほよそに、類別せしまでにて、固より、恰當完全なるものよあらねど、餘りに、廣漠たらんより、便宜のため、去ばらく、八目よ分ちたる也。されば、是れらの類よ、收め難きも、或ひハ多からむかし。

(一)主格の助辭 是れハ、れほかた、主位よある辭につく格にて、「ハ」も「ガ」の「ツ」の類なり。

ハ 此ハ、事物を各自に分つ意の辭なり。例へば「柳ハ緑、花ハ紅、善きハ取り、惡しきハ捨つ」の如し。扱亦「ハ」を連聲の調よよりて、濁る事あり。問えずんを答へず「學はずんを」知る事なしの如し。

も 此ハ、事物を、一樣よ並ぶる意の辭なり。「我れも人も、昨日も今日も、召す事ハなし、行くも歸るも、別れてハ」の如し。

のガ 此の二つの、全く同じ格なれども、種々意趣を異よする事あり。

一にハ、名詞等よ附きて、下の動詞、形容詞等よ、關係を及ぼす。「君が行く」

鳥が飛ぶ鶯の鳴く春のどけさ秋のさびしさの如し。

二にハ、所有の主を示し、或ハ其の由る所、また關する所を示す。君が世

鳥の巢梅が香櫻の花世の中天が下の如し。

三よハ、よあるの意を示す。奥の白川東の比叡蝦夷が島の如し。

四よハ、といふの意と、同じきものあり。吉野の山鐵拐が嶺などの如し。

五にハ、の如きと同じ意の辭あり。花の顔月の眉父が弟の如し。

のハ、元來動詞の第二階(連名法)よハ、附かざる格なるを、世間、ともすれば、花を見るの記雪を賞するの詞卒業式を祝ふの文と書く類あり。此ののハ、衍なり。記すよ及ばず。然れども、進むの早き勉強するの致す所などいふ類ハ、連名法の下よ續くべき、名詞を略せる格なれば、難なし。能く此の區別よ注意せよ。扱亦、結ぶの神登らむの志忘れとのため、の如きハ、その語句を名詞として、附けたるなり。

此の外、種々の詞よつきて、それハ、の關係を顯す事あれど、略せり。いた

づらよ、繁雜ならむよりハ、と思ひてなり。

つ 此ハ、前ののよ似たれど、今ハ、古格よ屬せり。されば、古來用ひ慣れたる辭に限りて、今の世一般にハ、用ひられず。例へば、天つ風國つ神遠つ祖外つ國沖つ風の類なり。

(二)資格の助辭 是れハ、れほかた、賓位よある詞よつく格よて、れほよそを「へ」の類是れなり。

を 此ハ、處分すべき事物に就きて、其の關係を示す辭よて、れほかた、他動詞に係るを常とす。書を讀む道を學ぶ往くを送り來るを迎ふの如し。

へ 此ハ、向ふ所を、れほかたよ指す意の辭なり。東へ上る奥へ出立つ前へ進め右へ向けなどの如し。

に 此ハ、前の「」と、ほよ相似たれど、一きを細かよ指す意の辭なり。而して前の「」と、ここの「」との區別ハ、漢字よあてて、云を「」ハ、邊の字に

ハ於の字は當るといふ。されば「ハ」はれほかたは、方向を指し「ニ」ハ其の地位を指すものと心得べし。例へば「机」ハ載す「椅子」ハ坐す「山」ニ登る「東京」ハ住む「横濱」ニ宿るの如し。此の外また云ひかたはよりて、其の意趣種々あり。用例左の如し。

一に、事物に相對するに用ふる例ハ「書」ニ對す「机」ハ向ふ「師」ハ問ふ「共」ハ學ぶなどの如し。

二に、事物ハ比較するハ用ふる例ハ「人」ハ劣る「花」ハ優る姿などの如し。

三に、「と」の意と、同じハ用ふる例ハ「楠木」ハ石「ハ」化す「桑田」ハ海「ハ」なるなどの如し。

四に、「ニ」就きて「の」意に用ふる例ハ「謂ふ」ニ「易」シ「行ふ」ニ「難」シの如し。

五に、「の爲」ハ「の」意に用ふる例ハ「花見」ニ「行」く「著述」ニ「忙」シの如し。

微細に考へなば、此の外もなほあるべし。

(三)不定格の助辭 是ハ、主格も、賓格にも屬すべき、また何と定めか

ねるものを假に然名つけし也。この助辭に「ハ」シ「ぞ」なむ「こそ」どよ「さ」へ「す」ら「のみ」ばかり「から」より「まで」の如き類あり。

し 此ハ其の一筋を取立て、重くいふ辭なり。例へば「島かくれ行く舟を」し「ぞ思ふ」今「し羽根」といふ所を渡る「國を」し「もさそ」にあれども「など」の如し。

ぞ 此ハ「夫」の意にて、數ある中に、唯一つを指し定むる意の辭なり。此の助辭、文中にある時ハ、其の句の末を結ふに、活用言の第二階を以てする事、既に云へり。書をぞ讀む時ぞ過ぐる能くぞ覺ゆるなどの如し。活用言ハ、第二階の下に連る法なり。

此の助辭も、又單に指定する意にて、語句の末に据うる事あり。夜さり行かむぞ見し夢の現となるハととりぞ「人ハ唯心ぞ」などの如し。又れなむ用法なれど上ハ代名詞の不定稱ある時ハ、疑問の意となる事あり。例へば「いつの事ぞ」いつくの人ぞ「そハ何事ぞ」の如し。

なむ　こも其れとれさへて、強くいふ辭にて、用法ぞよ同じ。但し、文よは常よ用ふれども、歌には稀なり。かくなむある形より、心あむまさりけるの如し。なむといふも、なむよ同じけれと、古格なり。

こそ　こは、數ある中にて、是れハ其れと、一つを押へて、強く云ふ辭なり。此の助辭文中にある時ハ、其の句の末を結ぶに、活用言の第三階を用ふる事、これハ既に云へり。書をこそ讀め、入こそ聞へ、時こそ過ぐれ、暇こそ無なれの如し。

だよ　こハ、今の辭よ、デモ、又、ナリトモと、云えん程の意なり。月よよ宿る柄家を行過きむも、流石よて鳥だよ、通はぬ山奥にて、今去ほしたに、れはせよの如し。軽く少き方を舉げて、重く多きを餘せる辭なり。

さへ　こハ、添への意なりと云ふ。一の事物ある上に、又、他事の、添ひ加はれる山の辭にて、前の「よ」とハ輕重の差あり。例へば、雨の降るに、風さへ吹く、花の美しきよ、香さへ薰りて、橋ハ香さへ、花さへ、その實さへ云々。

などの如し。

すら　こハ、今の辭に、ヤハリナホといふに同じ。鬼すらも都の内と、篋笠をぬぎてやこよひ人に見ゆらむ、心なき草木すら、時を知りて花咲くなどの如し。

のみ　こハ、一筋よ事を極めて云ふ助辭なり。我れのみ知りて、歎きのみして、何ぞ必しも小功のみならむの如し。さて漢文を直讀するには、「云々耳、何々而」^いと言ひ斷る事あれど、國語の法にては、然云はず、何々のみなり。云々のみならむの如く云ふ例なり。たま〜のみに、^いと言ひ斷りたるは、下の辭を略せるものと知るべし。

ばかり　こハ、量^いの義よて、限りを立て、云ふ辭なり。ほゞのみに同じ。「心ばかりは替らず、今日ばかりか」の如し。

から　こそ、事物の發起する、もとよ就く辭なり。去年から山籠りして、麓の流れも山から出づ、右から左へ云々、あけぬから舟を引きつゝのぼ

るなどの如し。

より 此も、又、事物の起りよ就きて云ふ辭なり。人より受く「空よりや降る」門前より馬に乗る「洲崎の邊より舟出す」遠方より來る「昨年より今年先刻より待つ」の如し。

此の辭へ、また、事物を比較して、定むるにも用ふ。例へば「山より高し」人より勝る「藍より青し」名よりも高き布引の「瀧」の如し。又一轉して、物を限る意よも用ふ。「風より外よ訪ふ人もなし」花より外よ知る人もなし」の類なり。

まで 此の至り着く程を云ふ助辭なり。「筑紫までまかると今まで待てり」未までたどる」の如し活用言よ第二階よ續く。

(四)接續格の助辭 是ハ、語句を下に續けゆく事、接續詞の如くなる辭をいふ。れほよそ」とども」とも「ばがに」をて」での類なり。

と 此のハ、言語を並べてもいひ、又下の語句よ續けてもいふ辭なり。

例へば「月と花とを愛づ」名と器とは人よかすべからず「見ると聞くとを兼ね」淵ハ瀬となる「雪ふりぬと見ゆ」友もあしといふ「あらとぞ思ふ」の如し又「の如く」といふ意よ、用ふるも多し。例へば「恩ハ海と深し」露と消えぬる命などの如し。

此の助辭ハ、元來活用言を承くるに、第一階斷言法の辭と、第六階命令法の辭との如き、語意の斷るゝ所に、續くべき法則なれど、たま〜「往くと來ると」あるとなきと「嬉しきと悲しきと」の如く、連名法に續けて、云ふ事もあるは、下の名詞を、略せるものと知るべし。

ども 此は、上の語意と裏表にて、反動の如き助辭なり。「君は往くとども我れハ往がと」風は吹くとども花散らじ」の如し。又「古くは」と「のみ云ひて、」ども」の意に通じたり。「人は怒ると怒らじ」人は咎むと咎めと花すゝき穂よ出たりとかひやなからむ」の如し。

と 此も、上の語意と、反する如き、勢を顯す辭なり。「春よなれど風寒し」

人は往けど我は止るの如し。

ども 前「とよ」の添ひて、一種の助辭となりたるなり。されば辭の意、また用法とも「とよ」れなど。以上の「とも」と「ども」の二つは、第三階は活用言の第一階は續きて、未然の意を顯し「とも」の二つは、第三階は續きて、既然の意を成す差別あり。左の表は就きて心得べし。

在り	往ぬ	爲	來	見る	教ふ	落つ	書く
と							
在れ	往ぬれ	爲れ	來れ	見れ	教ふれ	落つれ	書け
とも							

この三つは、思ふに違へる意をあらせず助辭なり。例へば「春にを成りぬるが風も寒くて空を曇れるが雨は降り來ずまた歩まむとするに歩まれず問ふに答へなしまた風間と思ふを生憎も浪とみゆかくまで云ふを聞きいれずなどの如し。以上の三つは、共は活用言よハ、第二階は續く法なり。

は 此ハ、助詞助働詞に限りて、連る助辭にして、第三階既然法、および第四階將然法の兩方に續く法なり。既然法の辭に續く例ハ「春くれ雁かへる也年ふれはよをひハ老ぬの如し。將然法の辭に續く例ハ「名よしれを云々梅咲か鶯來鳴るん」の如し。此の差別ハ、既にも云へり。て 此ハ、一事終りて、後に移り續く助辭なり。日暮れて道遠し書を讀みて文を學ぶなどの如し。活用言よハ、すべて第五階は連る法なり。中に、形容詞の第五階に續ける「風烈しくて浪高し山高くて水繁れり」の如きハ、第五階の辭の下に「あり」といふ辭のあるべきを略せるなり。

で 此の否定の助働詞なる「ず」に、前の「て」の重りて、更に約りたる、一種の助辭なり、「云をて」居らじ「せで」置かじ「行かて」ありきの如し。動詞の、第四階將然法の辭に續く。

(五)副詞格の助辭 是ハ體言、また活用言に附續して、副詞の如くなるものをいふ。れほよそ「つ」ながら「がてら」がてよ「から」すがら「おとよ」まよ「まよ」まよ「まかり」なべよ等の辭あり。

つ 此ハ、一事をなしながら、又他事よも及ぼす意あり、「若菜摘みつ」と萬代うたふ講説を聞きつと筆を下すの如し。而して、元來過去の助働詞なる「つ」を重ね云へるなりとぞ。されば「若菜を摘みつ」摘みつ「萬代謠ふ」と同意にして、動詞の第五階に續く。

ながら 此ハ、元よりの儘よなしおきて、撰ひ捨てぬよ云ふ辭なり、「見ながら聞く」讀みながら考ふの如し。又「其儘其」どもよといふ意よも用ふるハ、昔ながらの山櫻かなよし見む人ハ枝ながら見よの如し。又「なれど

も」の意よ用ふるもあり。例へば「さりながら」不本意ながら「然しながら」思ひながら「行かず」などの如し。動詞よハ、第五階よつゞく。

がてら 此ハ、其のついで「其事を志ながら」など云ハん程の意なり。「花を見がてら」人を訪ふ「山川を導まがてら」まづや渡らむの如し。動詞よハ、第五階に續く。

がてよ 此ハ、「其事の難さよ」又「なし兼ねて」の意なり。「時鳥わが宿をし」も過ぎがてよなく「行きがてよ」思ふの如し。動詞よハ、例の第五階よ、から 此ハ、「故に」の意なり。「吹くからよ」秋の草木の志をるればの如し。

動詞よハ、第二階に續く。
すがら 此ハ、「過ぐるまで」の意なり。「夜めすがらい」をねず「路すがら」物思ふの如し。

ごとに 此ハ、「いつも」いづれも「の意よて、それ一つと限らぬ意をいふ辭なり」。「春毎よ來る鶯年ごとに」咲く梅「入ごとに」問ふ「讀むごとに」感ず「な

どの如し。動詞よの第二階よ、

まにく 此の「隨ひてまた任せて」の意なり。「漕ぎゆくまにく」海の

邊よ止る人も遠くなりぬ。聲のまよく尋ぬ欲しきまにく取るの類

なり。動詞よの例の第二階よ、

まよ 此の前の「まにく」の略言なり。「夜ふくるまよよ人々集りぬ見

しまよを語る」の如し。

ばかり 此の「程またぐらぬ」といふ意なり。前の「不定格の助辭」とい

なり。「曉ばかり憂きものなしいかさをかり面白からむ三年をかりあり

て色ならば移るばかりも染めてまよ泣きぬをかりよいふ死ぬるばか

り也」の如し。此の助辭ハ、動詞の第一階よも第二階よも兩方に續く法な

り。

なべよ 此の「付けて」の意なり。「茅蜩の鳴きつるなべに日は暮れぬ」の

如し。古格よして今ハ用ふる事なけれど、附記す。

(六) 禁止格の助辭

是ハ動作をなすなかれと制止せる意の辭よて「な

なその二つあり

な 此の「莫」の意にて、動詞の第一階、および第二階よ續く辭なり。例へ

ば「牛の子よ踏まるな庭のかたつむりなれぬる影を人よ語るな」久しく

あるな」の如し。

なそ 此ハ、動詞の第五階の辭の前後に附きて、運動を制する辭なり

例へば「な行きそ」な立ちそ」な起きそ」な受けそ」の類なり。然れども、加行左

行の二變格活用言にハ、第四階將然法の辭よ續く格なり。例へば「なこそ

なせそ」と云ひて、なきそ」なしそ」と得云はぬが如し。

(七) 疑問格の助辭

是ハ疑ひ問ふ時、またハ疑ひ念ふよも用ふる辭よ

て「や」と「か」の二つあり

や こそ動詞の第一階に續く法なり。「我が思ふ人のありやなしや」思

ひ出づや」君見ずや」などの如し。但し「さよや」の意なるハ、第三階よ續く

か 此の動詞の第二階に續く法なり。あるかなきかに門さしこめて
思ひ出づるか君見ぬかなどの如し。

以上の「や」と「か」の語句の上にある時の、其の末を結ふに、活用言の第二
階の辭を以てするを通則とす。例へば「花やさく人や恨むる光や消ゆる」
風や寒き年や久しき何をか撰ぶ孰れか勝れる何處にかある誰か見る
べき何とかなすべきなどの如し。

(八)反動格の助辭 是は、語意を強からしめんために、わざと、裏うへよ
反して、いふ辭なり。「や」は「か」は「の」類これなり。

や 此は、疑問格の辭と同じけれど、一層強くして、反動となる也。例へ
ば「月やあらぬ(アリ)春や昔の春ならぬ(春ナリ)ひとへに君を我やわする
と(我レハ忘レヌ)などの類ひ、又助働詞にも續きて「かくらむものと思ひか
けきや消えずのありとも花と見ましや」八十瀬の浪に袖はぬれじや」な
どいふにて悟るべし。

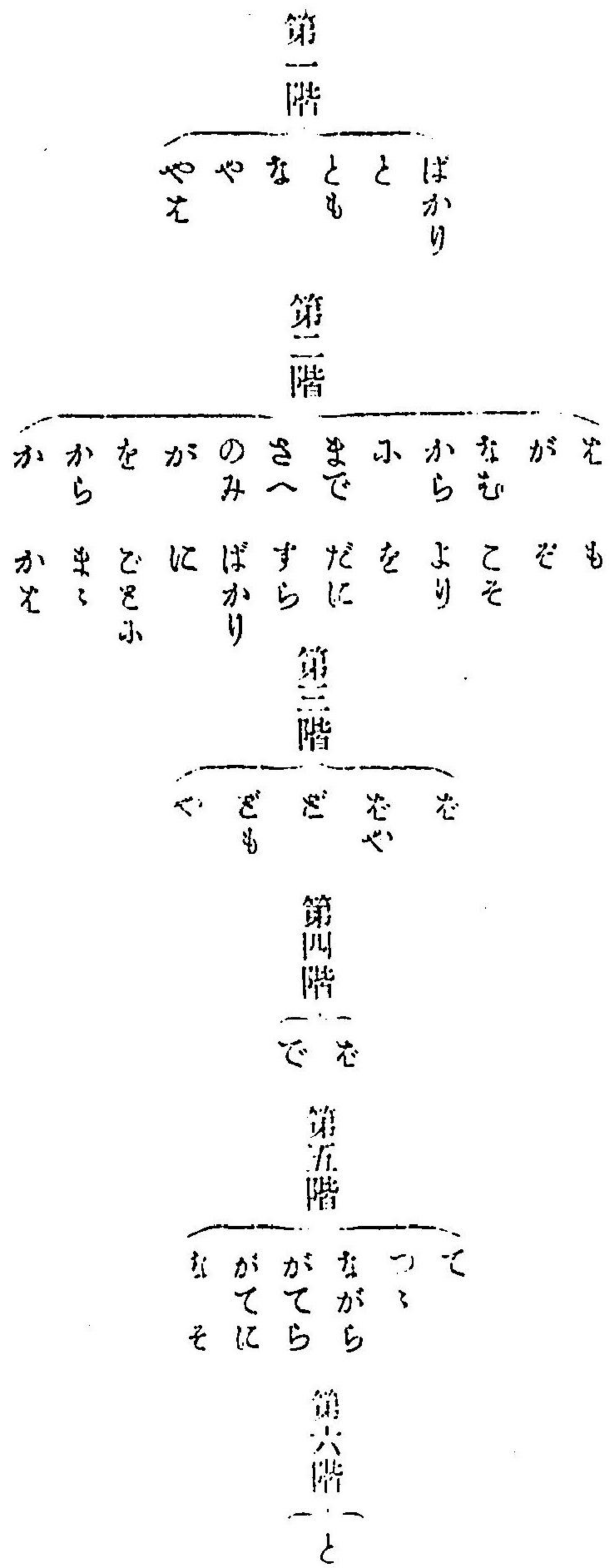
やは 此の前の「や」に「は」の附きたるなり。用例ハ「花こそ見えぬ香やそ
かくるとこれ程の歎きやはせし」の如し。

か 此も、疑問格の辭と同じきが、反動になれる也。用例ハ「老いずの今
日にはあはましものか明日もありと頼むべき身か何か恨みむ誰にか
言はんいかどかひなき夢になすべきいつしか人の目よもかくりし」の
如し。

かを 此も「か」の附きたるなれば、用例前にれなむ。二度とどに來
べき春かの替る人の心のみか誰も遂に頼むべきかなどの類
なり。

助辭ハ總べて體言、れよび用言に附きて、其の用をなす事既に、も云へり。
而して、其の體言に續くハ紛る事なけれど、活用言ハ例の變化ありて、
其の法種々なれど、連續の格また甚紛らむ。仍りて、更に左の表を掲げ
て、容易に心得まめむとす。

諸活用言と助辭との連續表



第三章 接辭

接辭といは體言、れよび活用言の首、また尾に接く辭にして、首に接くを發語と唱へ、尾に接くを添辭と唱へ來れり、是れらに意義を顯すものと、又

唯添ふのみにて、意義は關係なきものとの別あり。

(二)前接格 是れ、れほかた、意義なきものなるが、中に、賞美する意と、語勢を強うするため、の辭もあり。左の辭ども、いづれも體言、れよび活用言の首に接くものなり。

- 「霧」さ夜中「さ男鹿」さ渡る「さ迷ふ」さ走るの如し。
- 「ま弓」ま心「ま夜中」の如し。
- 「み雪」み空「み山」み吉野「み熊野」の如し。
- 「か弱」しか易「か細」しか黒き髪「か易」の如し。
- 「た謀」る「た比ぶ」た靡く「た弱」した易「た易」の如し。
- 「け劣」る「け壓」さる「け近」し「け疎」し「け恐」しの如し。
- 「い座」す「い向」ふ「い渡」るの如し。
- 「を」田「を」簾「を」野「を」暗しの如し。

又、左の辭ども、元來一個の動詞なるが、語勢を強くせんために、添へて

云へる辭なれば、動作を顯す意ハ、極めて輕し、ほどく、意なきものと見て可なり。

うち 〔うち聞〕うち見る〔うち讀む〕の如し。

かき 〔あき見る儀の前〕思ふどちかい連ね行くの如し。かいはかきの音便なり。

とり

〔とり沙汰〕とり置くとりきこゆの如し。

おし

〔おし立つ〕おし包むおし隠すの如し。

あひ

〔あひ繼ぎて〕あひ構へてあひ成るあひ願ふの如し。

さし

〔さし應へ〕さしうつむくの如し。

ひき

〔ひき越す〕ひき隔つひきつくろふの如し。

もて

〔もて隠す〕もて離すもて惱むの如し。

右の語例を見よ。打聞くハ、打ちて聞く意にあらず。打讀むハ、唯讀む事なり。又、末の「もて隠す」の「もて」ハ、持ちてなれば、動詞に助辭の連りて、更に一

種の辭となりたる也。

(二)後接格

是ハ、れほかた、意義をもてる辭なり。遂一に其の義を説くべし。

かし

〔覺ゆかし〕をかしかし〔云へかし〕勿れかしの如く、慥にそれと、念

を入れて云ふ辭にして、活用言の第一階と第六階との如き、語意の斷れたる所に接くなり。されば、助辭も、聞きねかし〔來ても見よかし〕さばかり

ぞかしの如く、なほ斷れたる辭に接く。

さ

〔遠さ〕深さ〕悲しさ〕嬉しさ〕逢ふさ〕きるさ〕入るさ〕歸るさ〕の如し。事物

の状態を顯す辭にして、狀の字の意といふ。

け 〔人げ〕近し〕外げに見る〕心ありげ〕物思ひげ〕重げ〕惜しげ〕惡げ〕の如し。

物の様體を云へる辭にして、氣の字の意といふ。

み 〔深み〕厚み〕赤み〕青み〕重み〕の如し。是れらの事ハ、假體言の條にも説

けり。

やか 花やか 嬾やか 和やか 貫やか の如し。

らか 清らか 明らか 晴らか 舒らか の如し。此の二つも、容態形状を顯す辭なり。

つ 「二つ」「三つ」幾つ の如し。物の數を云ふ辭なり。

づく 「一枚づく見る」「二人づく並ぶ」「鳥の子を十づく」「十の重ぬとも」の

如し。前の「つ」を重ね云へるにて、物を數ふる辭なり。

か 「二か」「三か」「十か」「二十か」「みそか」「いかもくろ」の如し。日を數ふるに云

ふ。此の外、かゝる類にて、人に「一り」「二り」、又「三たり」「四たり」の如く云ひ、劍に

「一ふり」「二ふり」の如く云ひ、弓に「二をり」「四をり」の如く云ひ、鎗に「一すぢ」の

如く云ひ、書に「幾まき」の如く云ひ、紙の類に「一ひら」の如く云ふ類、枚擧し

難し。されば、ある人の是れらの類を、別に數詞となづけたり。

べ 「山べ」「川べ」の如く、地位に就きて云ふなり。邊の字の意として見る

べし。濁るを例とす。

へ 「行へ」「後へ」の如し。前のごとく、同じ様なれど、これへ方向に就いて云ふ

なり。濁るべからず。

此の外、「仲麻呂い」「君い」しなくば、「のい」の如き「悲しけ兒ろ」を思ひ過ごさん

悲しきろかも「のろ」の如き類、いさとか有れど、古格に屬せれば、別に云を

ず。

下篇 句格

句ハ言語を組立て、成るものにして、其の長短ハ拘らず、必、首尾本末あり。そも、本邦の文章にハ、一句の中、その首位にある名詞、代名詞の類、またハそれに接ける助辭の種類に應じて、末位なる動詞、形容詞、助働詞など、もろゝの活用言ハ、其の語尾を變化する法則あり。換言すれば、語句の起りと結末とに、錯雜なる關係あるなり。これを、古來「係り結び」と稱して、文法上留意すべき一則とす。左ニ是れに就きての、諸則を説くべし。

第一章 係辭

係辭とハ、一句の中、首位にある名詞、代名詞、副詞の類と、是れらに接ける、ある助辭とにして、總べてを三類に區別す。

- (一) 一類 たゞそも
- (二) 二類 ぞなむやか

(三) 三類 こそ

(一)二類 此の中「た」といふ格より説かんに、是れハ、名詞、代名詞、接續詞、副詞の如き體言のみ上にありて、助辭の附續せざる格をいふ。左の例を見よ。

花咲く 我れ見る 志をし、立つ

又、止る ヤがて、去る 今歸れり

花といひ我れといふ類すなをち係辭なり。他ハ推して知るべし。

「は」と「も」とハ、助辭のうちにて、殊に重なる辭なれば、取出でたるにて、是れのみハ限らず、「が」「の」「に」「を」「へ」「つ」「と」「だ」「に」「さ」「へ」「すら」の類ハ、すべて、體言、活用言に附接する助辭を、總稱したるなり。

花ハ咲く 我も見る 風が立つ 露の散る

木蔭にイむ 垣を隔つ 右へ行く 往きて反る

右の例にて悟るべし。以上の名詞、代名詞等の體言と、「は」「も」等の助辭とを、

「二類の係辭」とす。畢竟するに、此の係辭ハ、二類以下の係辭に對して、輕き意の方を、總稱する名目と心得べし。

(二)三類 この中、「ぞ」と「なむ」とハ、辭の意全く同じ。唯、一類の「は」「も」の類よりハ、やく重きに用ふ。又、「や」と「か」とハ、疑問の助辭なり。いづれも、體言、用言よ附きて、係辭となる。左の如し。

花ぞ咲く 我れなむ見る 風や吹來る

雨か降來る 今や止まん 誰か往ぬる

扱亦古來「が」「の」「な」の三辭をも、此の二類の係辭なりと云ふ説あれど、今採らず。其の由ハ、後れのづから明瞭なるべし。

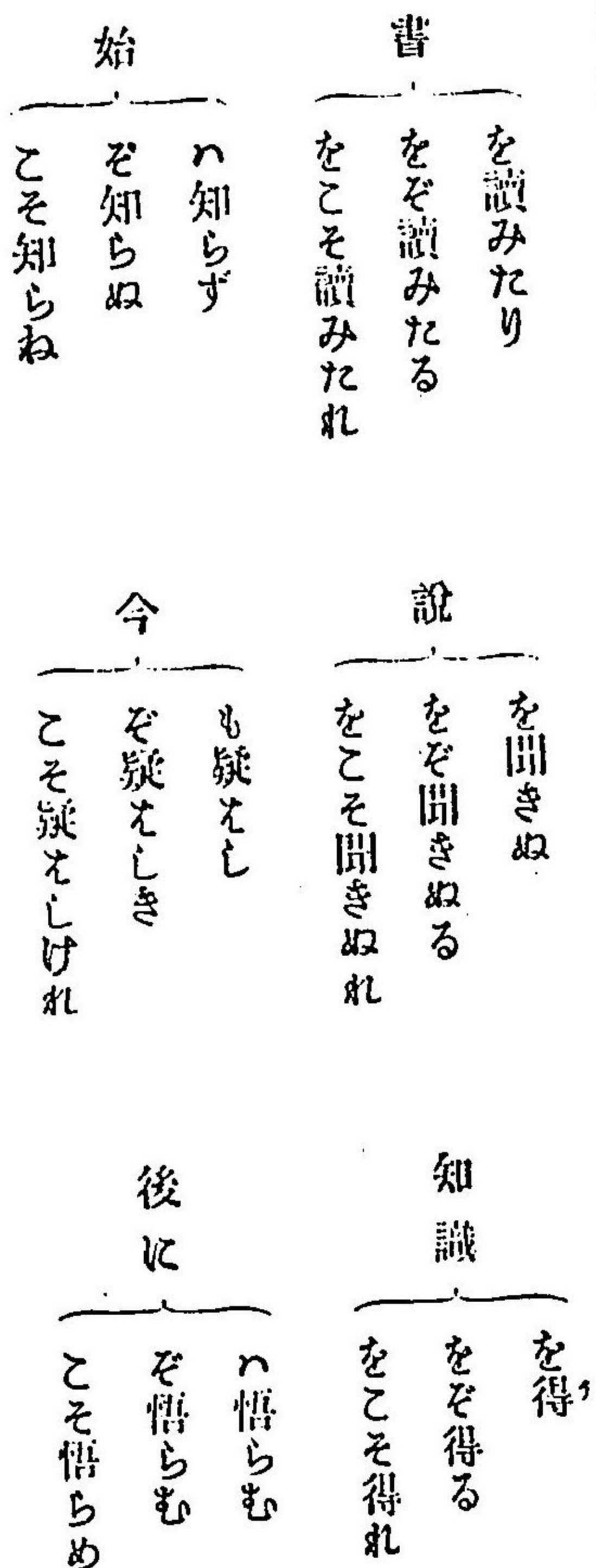
(三)三類 このハ、唯、「こそ」といふ一つあるのみ。但し、これハ上の二種に比ぶれば、特よ重くいふ時に用ふるなり。而してこの辭も、體言兩言よ附く事、二類に同じ。

第二章 結辭

結辭とハ、語意の終結となる辭にて、別一種の辭あるにあらず。動詞と
まれ。形容詞にまれ。又助働詞にまれ。上の語意に隨ひて、事物の落成を云
ふものなり。但し、上なる係辭の何如によりて、下なる結辭ハ、必、語尾を變
化せざる可らず。是れらの事ハ、ほと上よ説きたれども、順序なれば、爰に
も省かず云えん。

れほよそ、動詞、形容詞、および助働詞の如き活用言ハ、語尾の變化する事、
六階に分れたり。中に就きて、第一第二第三階の辭どもを以て、結辭とす
る事、活用言すべて然り。さて語句の上よ、一類の係辭ある時ハ、活用言の、
第一階の辭を結辭とし、二類の係辭ハ、第二階の辭を以て應じ、第三類
の係辭ハ、第三階の辭を以て應ずる定規なれば、この法をだよ心得な
べ、甚容易なる事なり。なほ上よ掲げし、活用言尾辭變化の圖どもを、披き
見るべし。左方の欄外よ、「ハ、モ、の結」ヅ、ヤ、の結」コソ、の結」と標記せしハ、是れ
が爲なり。

元來活用言の第一階の辭ハ、斷言法にして、下よ續かず。そこにて局を結
ぶ辭なれば、論なけれど、第二階、第三階ハ、連名法と既然法とにして、下
續き行く辭なるに、上に二類、また三類の係辭ある時ハ、連名法また既然
法たる性質を失ひ、斷言法と同性になりて、下よ續かず。其の、まゝ局を結
ぶ辭となるあり。



かく、三つ宛並べたる辭ハ、語尾こそ異なれ。語意に於きてハ、毫も異なら
ず。均しく是れ斷言法の辭となる也。

第三章 係辭重複格

係辭重複格とハ、一句中、係辭の幾個も重るに就きての格を云ふなり。そもそも係辭ハ、幾個重複すとも、れほかた一個の結辭を以て、これに應ずるを定例とす。左の如し。

我國ハ國種の變る事ハなけれども政亂るレハ曆數久しからず。
心正なれば身口ハれのづから清まる。

時の間に移ろひ安き花の色ハ今をさかりと見る空もなし。

右文のうち、「ハ」の如きハ、皆一類の係辭なれど、若し一類の係辭と、二類、また三類の係辭と、重複せば如何といふに、さる時ハ、一の重き係辭に應ずる、重き結辭を以てするを定法とす。例へバ、一類の係辭と、二類の係辭と重複する時ハ、二類の結辭たる活用言の、第二階の辭を以てすべきなり。左の例證を見よ。

院中の禮なども此れよりぞ始りける

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋ハ悲しき

又一類の係辭と、三類のと重複するにハ、無論三類の係辭なる、活用言の三階の辭を以てすべきなり。左の證を見よ。

今ハこの御末のみこそ繼體したまへ

雪ふりて年の暮れぬる時にこそ遂よみぢぬ松も見えけれ

一類の係辭ハ、甚輕きものなれば、二類三類よも重複する事常なれども、二類の二類、また三類と重複し、三類の三類と重複するハ、極めて稀なり。されど、又、斷じて其の例なしとも云ひ難し。

かくしてやなほやまからむ近からぬ道の間をなづみ參來て

世を捨て入りよし道の言の葉ぞ哀も深き色ぞ見えける

右ハ二類の係辭の重れるものなり。

郭公人のまどろむ程とてや忍ぶる頃ハあけてこそ待て

右ハ二類と三類と複り、重き方よて結べる也。

此の山の盡きバのみこそ此川の絶えバのみこそ止む時もあるめ
右ハ三類と三類と重複せる例なり。然れども、初心の人ハまねをざるを
よしとす。

第四章 結辭省略格

凡係辭あれば、必結辭を以て、これに應ずるハ、文法上の正則なれども、爰
に、又、文にても歌にても、係辭のみ置きて、結辭を省略する事もあり。之を
結辭省略格とす。その格に三つの例あり。

第一例 是ハ、係辭を其の儘、結局の辭として、其の以下を省略するに
て、祝辭に代へてかくなむ。今日卒業式を祝ふにこそ、其の類なり。正則
ハ、代へてかくなむ申侍る。祝ふにこそ有りけれと云ふべきを、省ける也。
古例に徴するに、左の如し。

大願の力にや。(アリケム)昨日なむ都よりまうで來つる。
津の國のなにも思はず山城のどハよ相見む事をのみこそ(チガヘ)

此の外推して知るべし。

第二例 是ハ、名詞、代名詞の如き、體言を以て係辭を受けて、其の下の
結辭を略せるなり。其の例ハ、

あらず玉の年立ちかへる朝より待たるくものハ鶯の聲(ナリ)
谷風にどくる氷のひま毎に、打出づる浪や春の初春(ナラン)
大方ハ月をもめでし是れぞこの積れハ人の老いとなるもの(ナル)
汝こそハ岩もあるあると(ナレ)見し人の行くへハ知るや宿の眞清水
とある類なり。

第三例 結辭を下の辭よ言ひ掛くる事なり。是れハ、歌また總へて諷
詠の文に限る。

歸るさを待ち試みよかくながらよも只よてハやまじろの里
明暮ハ昔をのみぞ志のぶ草葉末の露よ袖ぬらしつと
さ夜千鳥聲こそ近くなるみ瀉傾く月に汐やみつらむ

かゝる類は謠曲の文道行振と稱する體など、極めて多かり。

第五章 結辭接續格

結辭を其の下なる辭に言ひ續けむために、殊更に其の語尾を變へて、助辭に續くる事あり。これを結辭接續格と云ふ。例へば、

はよ續くる格

残る松さへ峰に淋しきと云へる歌をぞ云ふなるハ、誠よすこし、くだけたる姿よもや。

右ハ、歌をぞ云ふなる「よて、一段落をなし、次よさるハすこし云々」と書くべしを引續けたるなり。故に此の「ハ」と「さるハ」の意と見るべし。

ばよ續くる格

我れこそ知りたればいさたまへ

是も我れこそ知りたればいさ給へ。とあるべきを續けしなり。以下これよ准じて悟るべし。

にに續くる格

さるにの意

庭の面もまだ乾かぬに夕立の空さりげなくすめる月かな

きに續くる格

さるきの意

此の夢ばかりぞ後のたのみと去けるを云々

がに續くる格

さるがの意

檜皮屋を現じてぞ見せけるが云々

ともに續くる格

さりともの意

心こそ契りしまくに變るとも同じ空なる月や見るらむ

どに續くる格

されどの意

古今集の中の歌くづとかや云む傳へたれど云々

てに續くる格

さての意

然々なむのたまひて心に入りぬぞとさいなむ

かゝる例、古くより、文よも歌よもいと多し。此の格を心得て讀みも書き

もすべきなり。

第六章 變格

變格とは係辭結辭の正則に變れる格をいふ也。例へば、一類の係辭の下ハ、活用言の第一階の辭を以て結ぶべき法則なるに、させずして第二階の辭を、其の結辭とする事ある是れなり。これを歌よても文よても、風韻餘情を残せるものにて、勢ひれのづから、然なれるもあり。又殊更、然するもある事なり。されば一類の係辭を受くる、活用言の第二階の辭ハ、其の下「事」事かな「事」ものを「かな」などいふ、感辭を補充して見るべし。左に一二の例を示さむ。

逢ひよあひて物思ふ頃、わが袖に宿る月さへ濡るゝ顔なる(事ヨ)
谷の戸を閉ぢや果てつる鶯のまつに音せて春も暮れぬる(モノヲ)
世々ふとも我れ忘れぬや櫻花苔の袂に散りてかくりし(事ヨ)
梅の花香をのみ袖にとめねきて我が思ふ人は音づれもせぬ(カナ)

秋の夜ははや長月になりよけりよわりなれや寐覺せらるゝ(事カナ)
かゝる類ひ文章よも多かれど、文ハ前後の關係長きに涉りて引證に便ならねば、唯、歌の例のみ掲げつ。たほよそ、係辭結辭の關係ハ、早う本居宣長翁の紐鏡れよび詞の玉の緒といふ著ありて、例證を數々掲げ、又精細なる説あれど、爰よはたと大要を摘み、例證をも千が一を取りて、たほかた省きつ。いたづらに繁雜に陥り、冗長に涉らんよりハと思ひてなりけり。

注意として、附録すべき事あり。そを「用」の字の活用に就きて、世に二説あり。一ハ和行一段の活用言とし、一ハ波行上二段の活用言とす。今世の學者に、前説を主持するあり、後説を主張するありて、一定せず。余按ずるに、「用」の辭ハ、古代ハ前説の如く、和行一段活用言なりしに相違なし。其の波行上二段活用言となりしハ、中古以後の事なれど、本書よハ思ふ旨ありて、中古以來の慣用に從ひ、波行上二段と定

めつ。

又「ガ」の「なに」と云ふ助辭も、是れまで、おほかた二類の係辭と定められたれど、近ごろに至り、然らずとの論起りぬ。其の説の大要は、「ガ」の辭を「ぞ」「なん」と同じく、二類の係辭と定めしむ、たま〜詞の餘情を、殘す格を見て、遂に二類の如く、思ひ誤りしものなり、すなをち、

郭公深き峰より出にけり外山のすそに聲の落ちくる(事)

我宿の梅の立枝や見えつらむ思ひの外に君が來ませる(事カナ)

右等の如き、餘情を殘せる格ハ、謂をゆる一類の係辭も多かり。前の變格の條を見よ、扱又、古くより此の「ガ」の類ハ「ぞ」「や」などよ比ぶれば、やく、輕きによりて、格を弛めて結ひたるもありとて證とせる歌あり。

散りかくる氣色の雪の心地して花よハ袖のぬれぬ也けり

結ぶ手に影みだれ行く山の井の飽かでも月の傾きにけり

秋の田のいねてふををかけしかば思ひ出るが嬉しけもなし
是れらをこそ、却りて正格と云ふべけれ。その是れらの歌ハ、元より三十一文字にて事足り別に餘情をも殘さぬ歌なればなり。
又「なに」といふ類の辭も、元來代名詞にて、助辭にあらぬハ、二類の係辭ならぬハ、勿論なれど、是ハ疑問の辭にして、おほかたハ、此の下よ「や」「か」といふ疑問の助辭あり。是れ、すなをち二類の係辭なるからよ、混同して考へ誤りしものと見ゆ。されば、若し「なに」といふ辭の下よ「や」「か」といふ助辭の接かぬもあらば、その「なに」ハ、一類の係辭と心得べし。古歌に徴するに、

筑波根の峰迄かゝる白雲を君しもよそよ見るハなにになり

秋をてゝ今ハ盛の紅葉どうつろふ菊といづれまされり

長濱の眞砂の數ハなにならずつきせず見ゆる君が千世哉

かゝれバ「なに」いづれの類ハ、二類の係辭ならぬ事明けし。と云へる

にあり。
是れらの説げよもと思えるにより、本書よも「が」な「に」の類を、い
づれも、一類の係辭と定めつ。世間なほ二類の係辭と信ずる學者あ
れば、疑をしく思ふもあらむと、特よ斷りれくにこそ。

國語學 終

明治二十四年六月一日印刷
明治二十四年六月八日出版

定價金三拾錢

著者 關根正直

發行者兼 弦卷七郎

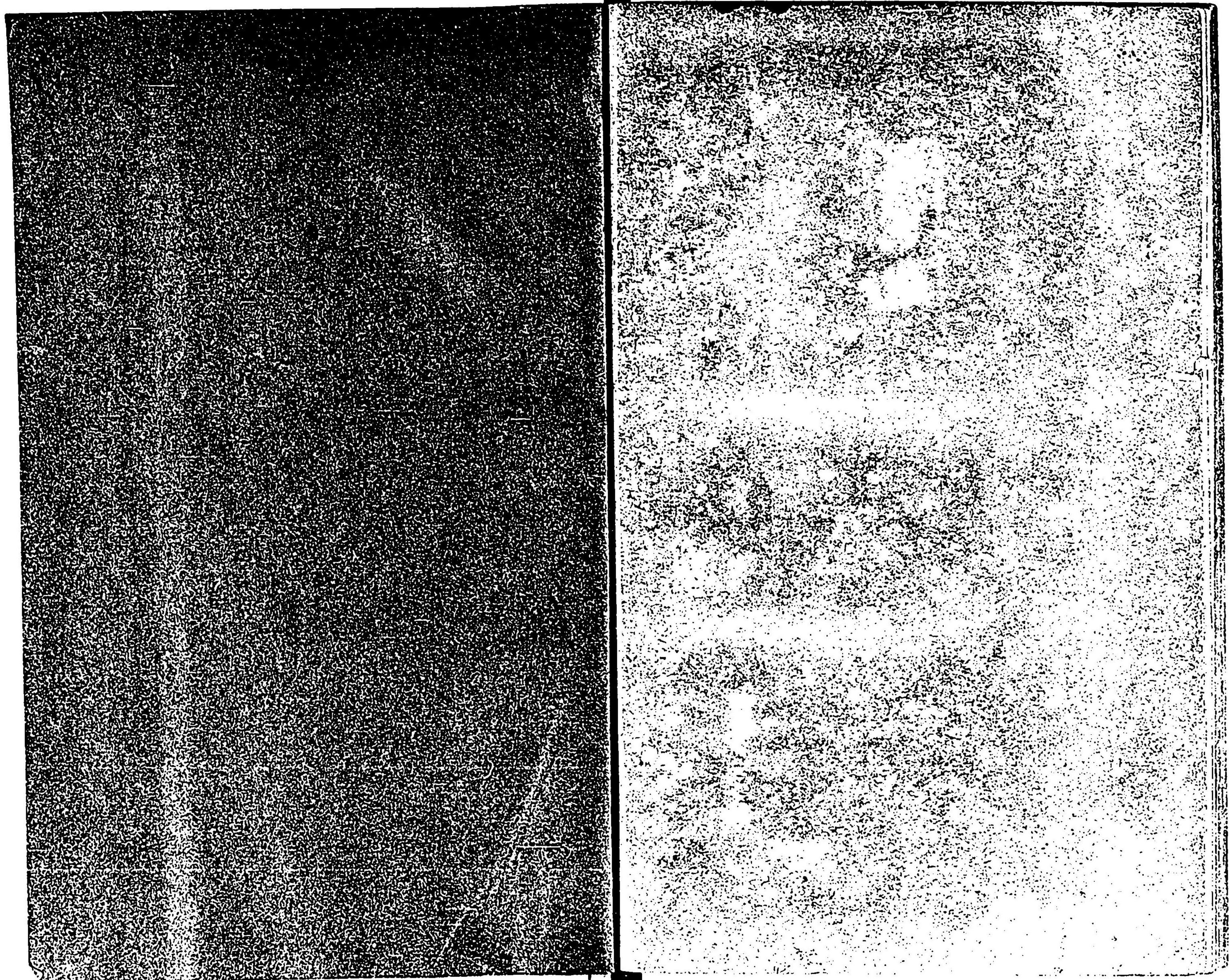
發兌元 弦卷書店

印刷所 製紙分社

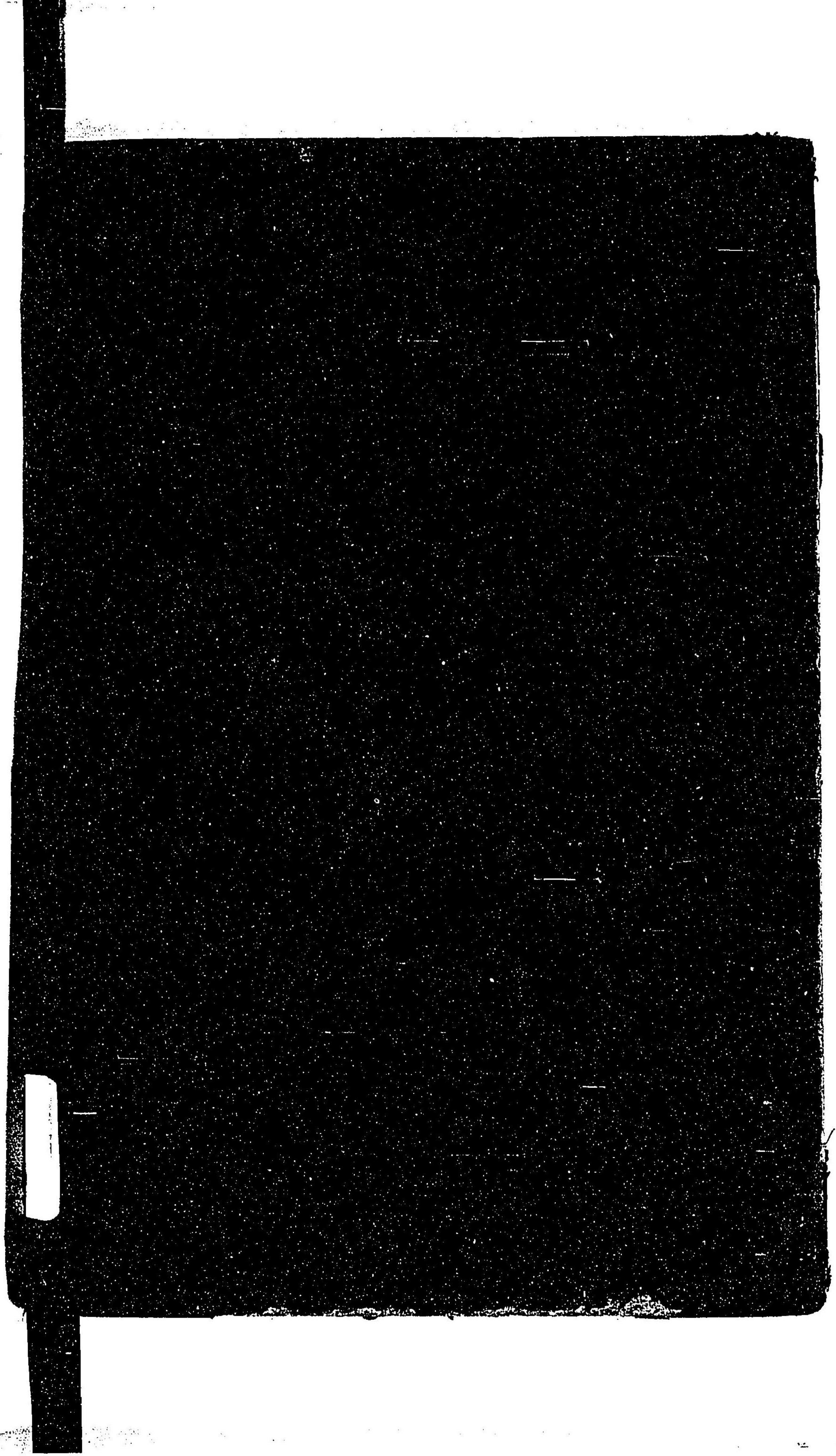
東京日本橋區兜町壹番地



東京日本橋區傳馬町壹丁目十三番地



22
319



22

319

076869-000-0

22-319

国語学

関根 正直/著

M24.6

DAC-0028



